女學雜誌

明治廿六年十二月五日發行

第五十[illegible]號

東京園之社

女鑑第五十二號目次

置目



女鑑 第五十二號

女鑑

質素の風尚

人の、最憎むべき惡德は、驕奢なるに在り。されば、貴となく、賤となく、老となく、少となく、先、この驕奢の念を去るべきものにして、母たるものゝ、其の兒子を育つるに當りても、最、意を用ゐて去らしむべきは、驕奢の萌芽なり。貴きものは、驕奢を好むがためゝ、其の身を傷ひ、賤しきものは、驕奢を好むがためゝ、其の身を立つること能はず。母たるもの、襁褓の中より、驕奢の念を禁遏することなからんか、其の兒子たるものゝ、一生の運命も測り知らるゝなり。

今、兒子をして、其の欲するまゝ〳〵、衣食を給し、絶えて、之を節約することを知らしめざらんか、彼等成長の後は、果して、如何なるものとなるべきか。ロックは云へり。幼兒を教養して、有爲の人物となさんとするもの、若し、其の葡萄、若くは、砂糖漬を得んと、泣き叫ぶ毎に、之を、望のまゝに飽かしめんか、習、性となりて、成長の後は、酒色に耽溺し、之を制することを知らざるに至らんと。總べて、人は、其の年齡に從ひて、種々の嗜好あるものなれば、幼き時より、之を、自制して、慾情を擅にせしめざる道を教へざるべからず。古の人は、質素にして、大小名と雖、或は、一生、木綿の服を纏ひ、或は、夜話などには、炒豆を出だし、砂糖など塗るときは、奢の沙汰なりとして、之を擯斥したりきと。人間社會は、進み行くに從ひ、衣食住の美好を盡くすべき道

理なれども、驕奢、其の度を過ぐるに至りては、啻に、一身を誤るのみならず。されば、吾人は、世の益を計り、人の幸福を增進せしむることを勉むると共に、質素の風尙を興こして、以て、其の家を守り、其の身を安んずる途を講ぜざるべからず。自己の口腹を豐にし、其の慾情を飽かしめて、而して、尙、文明の幸福は、此の如きのみと、放言し居るものさへなきにあらず。吾人の質素を尙ぶは、これらの自利的精神に反する所以なり。

論說

女子學問の精神

大林弘一郎

凡、世の學を爲すもの、皆、各、其の精神を具へざるものはあらざるべし。何の

學をなすも、畢竟は、皆、其の才能を長じ、智識を殖する爲にあらざるはなければ、其の志す所は、多少の異なるものあるも、皆、其の蘊奥を究め、淵源に溯らざれば止まざる覺悟なるべし。然らば、人々、孰れも、其の學をなす眞意精神に至りては、皆、相同じと云ふべし。されど、これ、今日の百科の學術を修むるものゝ、各自の心得目的とするに過ぎずして、眞の學問の精神とは云ふ事を得ざるなり。今、試に、其の一二の理由を云はんに、先、第一には、政治、法律、或は、理財の學などは、近來、人の崇尚、最甚しきものなれ共、其の目的とする所、各、差ありて、其の國家を安んじ、太平を致すの術に至りては、或は如何にぞや。剰、其の學者の中には、各自の一家の理財經濟を先務とし、急要とするものも多しと聞きぬ。これは、學の惡しきには非ず、たゞ、其の修むる所の精神の正

しからざるが故なり。又、哲學、文學、史學などに、力を盡す人も、近來、尠からずとす。そが中には、偶、忠君の誠、愛國の眞を存する人なきには非され共、多くは空理に泥みて、徒に、人間に必要なき談論に日を暮すもあり。或は、古今の詩文歌詞を論評して、國家の治道に要もなく、人生の道義に害ある歌文を稱揚して、已、獨、文學の心體を得たるが如くなるあり。或は、内外の史籍に沈潛して、年、尤、久くしても、一向に、史學の要を解せず、史學は、たゞ、事實を明かにするもの、興亡を表する具なりとのみ心得、最、淡然として味なきものに見做し、要もなき人物の有無を論議し、世道人心に大關係ある事實を、漫然、淆亂して顧みざる如きに至るもあり。而して、史學の世道に關し、道德に關するが如きは、一向に、解し能はざるもの、尤多し。これ、亦、史學、其の物の惡しき

には非ず、學ぶ人、修むる人の精神の正しからず、確ならざるが故なり。かく、論じゆて行かば、益々、學問の要領を得るは、困難の事なるを知るに足らん。たとへ、修むる所の學科、其の物の眞意を究め得るとも、其の上に、我が國家の治道、人生の道義に於いて、果して、衝突する所はなきか、支吾する所なきかを考へて、後に、可なるのみ。これを、精神を具して學問をなすものと云ふ。しからば、人の學問は、必、此の世、此の民に利せし爲に、先、我が一人の才能智識を磨勵啓發して、後に、博く人に及ぼし、遠く世に施すを以て、大目的大精神とする事、天下古今の通義とする所なり。かゝる、大切要なる學問なれば、男女に論なく、貴賤を問はず、苟も、書を讀み得るもの、理を聞き分け得る程の能力あるものは、必、一人として、修學せざる事なかるべき也。約言せば、學問は、人の

人たる道理を知り、人の人たる、本分を全うする爲にするものと云ふべし。然るを、世の學問を修むる人々の、此の大目的大精神を以て、之を貫徹するもの、至りて、少きは、自ら世間の風潮、自然の勢によると雖、豈、慨嘆すべき事にあらずや。勢なるものは、自然の漸を以て成るものなれ共、之れを制するものも、人力の及ぶべき所、能くすべき所なれば、眞心の目的を定め、精神を正うして學を爲すものあらば、之れを挽回する事、何の難きことあらんや。

嘗て、婦人、爲學の有樣を觀るに、蓋、亦、前者の弊に陷らざるもの、殆、稀なり。いかでか、此れが矯正の策を講ぜざるを得んや。すべて、物事、皆、本末先後ありて、之れを顚倒する時は、萬端、皆、逆行すべし。故に、學問に於いては、本來、先後の叙次を謬らざる事、最、肝要とする所なり。さて、其の本末とは、

如何と云はゞ、人には、人の本分あり、其の中にて、男子は、男子の本分あり、女子は、女子の本分ありて、人、亦、同じく知る所なるべし。然るに、其の本分を全うせんには、いかにせば可ならんと云ふに、他なし。學問によるのみ。こゝに於いて、學問の必要起こるなり。されば、學問は、無論、身を修め、行を立て、父母鞠養の洪恩に報い、國家愛撫の洪德に答ふる爲にあらざるはなし。是、即、學問の本なり。この本を先にして、其の精神を定め、行を愼み、身を修め、一々、之れを實際に體驗して、所謂、至善に止まると云ふ止まり所に止まるに至らん事を希はざるべからず。婦女子は、固より、母の重任ある身分なれば、其の本分も、自、易々ならず。故に、其の學問も、すべて、實行の上に於いて、必要なる實學をなさゞるべからず。空理虚文の研究は、尤、益なくして害あるものとす、

實行は本なり、文學技藝は、皆、末なり、徳行は本なり、名譽利達は末なり、今日の學者、すべて、之れを顚倒して、却りて、以て、得たりと思ふは誤ならずや。今、試に、其の一二を擧げんに、先、第一には、活路を求めん爲にするもの、最、多かるべし。其の次は、名譽を得ん爲にするもの、又、其の次には、小技藝を以て、人に誇る爲にするものあり。今日、官私の學校に入學せるもの、極めて多しと雖、其の目的とする所は、蓋、此の數者の内を出でざるなり。偶、道德を口にするものあるも、これ、また、眞正なるものにあらず。たゞ、口に任せて喋々するのみなれば、實踐の學、躬行の教を崇尚して、人生の本分を盡さんとするものは、殆、絶無とも云ふべし。若、これを然らずと云はゞ、試に、官私の學校を卒業するものと雖、必しも、定俸を受くる事を得ざるものとせば如何。必や、其

の入學を止息するものあらん。これ、法學生の、近來、減じ、國文學者の、今日、增加するの實例に徵して明かなるものにして、畢竟、其の目的の利祿に存するが故なり。これ、金儲けの學問、活路の方便として、學問を應用するものにして、第一に、學問の精神を誤まるもの也、或は、將來、教育に從事せんとして修學するものも、實際、力を教育に盡し、死して後已むとの決心あるものなく、只、其の心底を穿たば、多少の俸を得て、其の一身一家の用を達する意に外ならず。又、文學を好みて、漢文洋語まで、我が國文と共に究研するは、最、其の才學の浩きを見るべきも、如何せん、只、東西文章の比較に區々とし、或は、一章句の末技を論談し、歌詞優劣の穿鑿に日を暮らし、偶、論著する所あるに至りても、唯、己の博學を世に誇衒して、虛名を博せんとするに過ぎずして、言論の、一も、

世道人心に關せず、道德の如何に至りては、別に、天地を開くが如く、毫も相關せず、且、淫靡浪蕩の文辭を以て、却りて、風俗を壞亂するに至るものさへあるに至る。これ、名譽の爲にする學問にて、却りて、又、其の中には、名を汚すものあり。これ、即、次に、目的精神を失ひ誤まるもの也。他の小技術小藝能を磨きて、音樂工技の末をのみ心掛くるものは、言ふに足らねども、これ、亦、其の精神なきは、即、一なり、かく、論じ盡さば、今日の學問は、殆、皆、修むるに足らざるものゝ如くなれ共、これ、決して、然らず、必しも、學問の、悉く、朽腐せるには非ず。たゞ、教育の方法、未、其の完全を得ずして、學者の方向を明ならしめざると、修學者の精神の正一ならざるとによりて、一身を誤るに至るのみ。然れ共、人々の、利欲に趨走することの甚しきは、これ、單に、教育の方法如

何のみには非ずして、國家の責、未、盡ざる所あるによれるなるべし。豈、當然の理勢とのみ謂ふことを得んや。若、それ、眞正の大目的を定め、大精神を養ふには、如何せばよけんと云はゞ、余は、將に言はんとす。和漢の書を讀み、人の踐むべき道を踐み、古今の理を明にして、人の行ふべき所を行ひ、父子、夫婦、昆弟、朋友の間を處するに禮ありて、相和合し、琴瑟の和するが如くにして、以て、上無上の天皇に奉事するに止まるのみと。女子學問の要とする所、亦、此の極に至るにあり。若、此の外に、方針ありと云はゞ、我が日本國の人たるもの、知るべき所に非ざるなり。冀はくは、世の孃子達、各、其の本分を誤まる事莫からん事を。

女子要言　第二篇（廿四）

三輪田眞佐子

其の六　女子の生活及人物

落葉聲ある秋の夕は、諸行無常を感ぜざるものなく、櫻花、燦たる春の曙は、心氣恍惚を覺えざるものなからん。されど、秋の光景を以て、春に勝れりとするものあり。春の紫紅を以て、秋に劣らずとするものあり。斯く、人は、此の宇内の森羅萬象を、種々に感ずる樣に從ひて、大に、信仰を異にし、嗜好を別ます。此、生存の目的、及、方法に、大差を生じ、施いて、各、生活の趣味、乃、品格相分かるゝ所以ならん。以下、此の品格に就いて、大概を論ぜん。蓋、一家の生活は、女子の主る所なれば、女子の好む生活の趣味は、一般の生活をも同化するに至るは必然なり。豈、忽に考ふべけんや。

第一　幸福なる生活。　人、誰か、幸福を得ることを欲せざらん。而して、亦、誰か、能く謀らん。幸福を欲する心切なるものは、反て、不幸に陷いること多きを。蓋、女子の幼き時は、父母、之を愛する、玉にも勝るばかりなれば、恒に、身に綺羅を衣て、飄々然として、花を追ふ蝶を、亦、追ふ抔、無我無心にして、一點の邪氣なきものなるに、惜い哉、其の、稍、長ずるに及び、書を讀み、説を聞き、且、世事を見ること多きに至らば、諸般の煩悩に纏はれ、自天命に依らで、幸福を得んことに汲々として、上智のもの、只、奮然、碩儒たらんと期し、大醫たらんと企て、汗、流れて玉をなす炎天の日をも、寒燈、凄々として、鍾聲、哀なる深夜をも厭はで、究學、是れ、勉む。呼、盛なる哉。然り、而して、其の効顯はれ、遂に、業成るの日、何ぞ謀らん、顔色蒼然、眼窩谷の

如し。忽、指を屈すれば、齢、既に、三十を越えぬものあり。固より、吾は、其の志の卓爾たるを賞するも、今後、如何に身を處するやを尋ぬれば、多年の刻苦、反りて、其の身の仇ならざるを知らんや。或は、男子、政界に逍遥して、芳名、巷に聞こゆるを羨み、己も、獨立横行して、萬業、男子に倣へば、一生の幸福、之れより大なるはなからんと、先、叫び起こす。社會の改良と、女權の擴張を、何ぞ期せん。忽、世の擯斥を受け、山川、其の身を容るゝを肯せざるに至る。或は、人は、他より束縛を受けざるこそ、最大の幸福なれ、嫁して、良人に從ひ、舅姑に服する如きは、固、巳の望まざる處なりと、決心するものもあらん。されど、世には、其の身の紅顏、尚、衰へざる間は、朝夕、機に乘じて、名を汚さんとする無禮漢なきに非ざれば、必、高枕の日は稀なるべし。否、

已に、老いに近き己は、將に沒せんとする西山の夕陽に等しきものと感ずるに至らば、忽ち、誰を恃みて餘命を送らん乎、果して、冥目すれば、あはれ、已の墓標は、茫々たる雜草の中に朽つるならんと、彼の、小町の靈が、業平の歌ふに應じて、(おのともいはじ薄生ひけり)と告げたりし悲慘なる口碑を聯想し、懼慮、啻ならざるべし。然れども、此等、上智の女子は、各、信ずる處ありて爾するものなり。焉ぞ、其の志を奪ふべけんや、唯、吾は、斯くの如き生活は、幸福なるものにはあらずといふのみ。

次に、下智の者を見るに、大抵は、天地、及び、人類の何物たるを悟らず、從ふて、已を愼み、親に事へ、夫に從ひ、及、子を育つる道を辨へずして、自思へらく、口、恒に、珍美に飽き、體、恒に、絹布を纏へば、沒世の幸福盡きんもの

と、人世の目的を、唯、衣と食とに限るなり。然れども、彼等は、飛鳥の美食に飽き、走獣の麗しき毛皮に及ばざる遠きを如何せん。且、上智の人の如く、精神の修養をなし居らざれば、明月を見るも、眞の美妙を感じ得ず、世人に接するも、眞の娯樂を味ふ能はずして、終生、公衆に笑はれ、家族に叱られ、蠢々として此の世を渡るに過ぎず。哀なる哉。或は、先、容貌を修めて、而して、疾く嫁すれば幸福なりと信じ、父母の命に背き、兄弟の戒に違ひ、日夜、髮を櫛り、粉を施すを、是れ、事として、唯、其の掌指の剛くならんことを恐れて、茶瓶の倒るゝを起こすさへ、之れを厭ひ、而して、其の面部の黑からんことを察して、夕陽の窓を射るさへ、之れを避け、蘀兮蘀兮、風其吹女、叔兮伯兮、唱予和女の願意を以て、遂に、嫁するものあり。然れども、彼等は、固、未、人の妻とな

りて、而して、家を修むる材幹を養ひ居らさるものなれば、忽、舅姑の怒りに觸れ、良人の歡を失ひ、一生の樂事、止むや必せり。或は、富貴を幸福なりと思ひ。良人の門地、及、財産を錦城鐵壁として、終生の幸福を期するものあり。這は、毫も、之れより産する幸福は、一時にして、且、肉體のみに關するものたるを知らさるものなり。乃、良人、一朝黃泉に入らば、門地、何ぞ其の妻を慰めん。千變萬化は、天地の常なり。榮花、豈、獨、永續すべけんや。要するに、此等、下智の不幸は、悉、無學の弊なり。今日、女子の無學を妨げなしとするものは、此の不幸を救ふ術を知るや、否や、敢て、女子就學の減少を得意とする人に問はまほし。

斯くの如くんは、女子の幸福、果して、何くにかある。曰はく、天然に從ひ、

天然を樂むにあり。見よ、獸は、山に遊び、魚は、淵に躍るを以て、天然の樂とす。若、彼等をして、其の位置を代へんか、困苦して將に死すべし。女子にして、女子の天然を外にして、幸福を得んと欲するも得べけんや。以上、幸福を求めて、幸福を得ざる女子の種類は、天然を離れて幸福を求むるもののみ。是れ、天、豈、人に幸福を與ふるを欲せざらんや。詩に曰はく、永言配命、自求多福矣と。乃、女子は、女子に相當する業務に從事し、時季至らば、人の妻となり、母となり、常に、春天の如く温和なる生活をなせば、眞の幸福を享くるものなりと云ふべし。而して、女子普通の學問たる、此の幸福を獲んため、才幹を作り、併せて、良人死し、家財盡くる時、世路の難を堪ふる女德を養ふにあり。然らば、幸福の生活をなさんと欲せば、必、學問をなさゞるべから

ず。

第二　快樂なる生活。　人の愉快には、不斷のものと、一時のものとあり。思一思せば、一時の快樂は、快樂と名くべきものにあらず、何となれば、其の應報は苦痛にして、之れを數學の語にて言へば、正數、負數、相加へば零となるに相等しければなり。例之ば、酒の池、肉の林の樂も、一度、之れに飽けば、其の樂や、忽、盡き、昨春觀し墨堤の櫻、昨秋賞せし姨捨の月は、今年の我を娛むるに足らん、否、良人に秘して劇場に行き、父母に忍びて寄席に遊び、其の他、雜話に笑ひ、衣類を奢る等は、悉、一時の快樂にして、時と共に消え、所とゝもに、去るのみならず、其の應報は、家財滅し、家族謐き、衆人笑ふ如く、一寸の樂には、必、一寸の苦伴ふものなること明かなり。故に、識者は、此

の類の娯樂を肉體的のものとして、大に、排斥するなり。

然れども、精神的の快樂は、晝夜を分たず、醒眠に拘らず、永續常存し、而して、老若貴賤を撰はずして、普通に亨け得べきものなり。乃、老いたる親の手を擦り、足を撫で、孝養を、是れ、事とすれば、其の怡々として發する滿足の歡聲は、孝女の身には、春の曙に綿蠻たる黃鳥の音を聞く樂にさへ勝る千萬ならん。女子、一家の長となり、霜降る朝も、嵐吹く夕も、和氣藹然たる團欒の小天地を作り、將に、傾かんとする家運を回復し、相背ける隣人を懷け、相怨める親戚を和げば、其の快事も、決して、少からざるべし。既に、子あらば、家庭敎育を專にし、其の成人の後は、賢士德女たらしめんとする希望の眞味は、筆紙に認め難かるべし。其の他、夙に、學問の智德を養ひ、女子たる本職を盡くし、

天倫を守るより生ずる快樂は、悉く精神の快樂なれば、單に、平和富貴の日のみに限らず、たとへ、疾病に罹り、貧困に陷いるも、胸中、恒に、綽々として餘裕あるべし。孔子曰はく、一簞食、一瓢飲、人不堪其憂、回也不改其樂と。女子も、女道を修めば、必、其の類の樂あらん。漢小君は、富豪家の娘なりしが、父、深く、鮑宣の、德を修め、約を守るを、歎賞置く能はずして、之れに嫁せしむるや、忽ち美飾を棄て、短裳を着て、夫と共に、車を輓きたるは、一見、泯々たる生活をなしゝものゝ如しと雖、其の實、相愛する夫婦偕老の樂は、反りて、玉臺に住みて、單に、肉體の娯をなすものに勝ること遙にありたりけん、是れ、所謂、快樂の生活をなしゝに外ならず。數多の女子中には、肉體的の快樂のみを知りて、未、精神的の快樂を知らざるものもあらん、嘉肴ありと

雖、食はざれば其の甘を知らず。讀者、暫く、精神界の快樂を試みよ。

史談

置目

馬醉木滋野

置目は、近江國の人、狹々城山君の祖、倭帒宿禰の妹なり。清寧天皇は、皇子おはしまさず、皇緒の傳ふべき所なきを憂ひ給へり。時に、履中天皇の御孫、市邊押磐皇子の御子、かの近江國來田綿蚊屋野の難をさけて、播摩の明石におはし給へり。天皇、むかへて、大統を繼がしめ給ふ。即、顯宗天皇と申し奉る。天皇、御位につかせ給ひ、御父皇子の、多難に遭ひて郊野にをはり給ひ、今は、御骨のおはす所だに、さだかならざるを悲歎し給ひ、詔して、耆老を召しあつめ、天皇、御躬、歷問し給ふ。一老嫗あり進みて白さく、置目、御骨の埋みおはする處を知れり、願はくは、御供の數に侍ひて、示し奉らむと、是に於いて、天皇は、皇太子億計王と置目をしたがへ、近江國來田綿蚊屋野に幸し、置目のさす處を掘らしめて

見給ひしに、果して、置目が言へる如くなりき。天皇、皇太子ともに、穴に臨みて、いたく哀慟し給へり。されど、帳内佐伯部仲子が屍、交へ横りて、皇子の御骨を別つこと能はざりき。こゝに、磐坂皇子の乳母、はべりて奏さく、仲子は、上の歯おちたりき、それによりて、皇子の御骨と、仲子とを別つべきをと。されバ、乳母の言によりて、髑髏は、別つことを得たれど、竟に、四支、および、諸骨をわかつこと、得難くなりけれど、已むことを得ず、蚊屋野の中に二の墓を築き、形、一の如く、葬儀も異らずし給へり。さて、置目に、詔し給ひ、皇居の傍近く侍らしめ、かしこくも、優崇賜卹み給ひて、たらはぬことなからしめ給ひ、また、詔したまはく、老嫗は、伶俜羸弱にして、行歩に便ならず、宜しく、繩を引きわたし、それに依りて出入せよ、繩の端に鐸を懸けおきて、謁者を勞はすことなく、入るときは、これを鳴らせ、朕、汝が到るを知らむと。置目、詔をうけたまはり、繩を御座近き處まで引きわたし、鐸を鳴らして參入し奉れり。天皇は、遙に、鐸の聲をきこしめして、歌よませ給ひき。

淺茅原、をそねをすぎ、もゝつとふ、ぬでゆらぐもよ、置目くらしも、

がくて、倭袋宿禰も、妹、眉目が功により、本の姓、狹々城山君の氏を賜はれき。

石川伊八の妻いし女

古里をの子

またの夜、いつものやうに話しきこゑさしゝは、石川伊八ぬしの妻いし女ぬしのことなり、こも、また、貴社にものしつ、

いしは、周防國吉敷郡岩淵村の民、某が女にて、石川伊八といふ者の婦なり。舅姑ともに、はやくより、蹶疾にてうちふしゐるほどに、いつしか、困窮に迫りて、田畠なども賣拂ひたりけれど、つひに、朝夕の烟をもたてかぬるに至りて、いしが夫伊八、活計のみちを失ひ、農業を廢てゝ他國に行き、商賈のわざに年月を過しけれども、利を得ることを能はざりしにや、久しく、家に歸り來らず、いづこに居るといふ音信だにせざりけれど、いし、空閨を守りて操をかへず、晝は日傭にいで、夜は紡績して、舅姑を養ひ、かつ、手を添へざれば、臥すことも起くることも得せぬあしなへなれども、其をいさゝかも厭ふ色なく、よろづにつけて心を用ゐ、その家、眞宗にて、舅姑ども法義をよろこびければ、近邊の諸寺に佛事ある時は、舅姑をかは

るがはる背負ひて詣でしめ、暑の日は、涼しき蔭に伴なひ行き、冬の夜は、爐火に倚らしめて、二便のあつかひ、かれこれ、尋常の女の、かけても得せぬわざをもし、懇に事へければ、舅姑も、身のかなはざる憂をわすれて、朝夕、たゞ、念佛をのみぞつとめとしける、然るを、近隣の知れる人、かく、獨身を以て、行衛もしられぬ夫をたのみ、甲斐なき辛苦を盡すを見、勸めて、おやのもとへかへらしめ、他に嫁がしめんとはかれる者もありしかど、いし、甚く否みて、かく、衰病の舅姑を見捨て、外に縁を求めんことは、さらに思ひもよらざるよし答へて、ひたすら、從一の節を守り、夫の、久しく歸りこぬをのみ歎きゐたりけるに、折しも、長崎の者の、そのわたりに來れるが、いしの孝行に感じて云へりけるは、さいつとし、周防の者のよしにて、おのれが逢ひたる人あり、年齢容貌、聞く所に似たるやうなり、必、これなるべし、おのれ、歸郷したらんには、歸國を促し見るべしと云ひたりしが、その言を違へず、長崎に歸りて、伊八に遇ひ、いしが事を語りけるに、伊八、妻の貞操に耻ぢ、やがて、彼地を發足し、岩淵村にかへり來れり。久しく、他國に流離へ、兩親をも顧みざりし不孝を悔み、いしと共に、農業に力を盡し、父母に孝養を致しけ

るほどに、里長上田少藏、善を好める者にて、本藩の憲官楊井盛之が、部内を巡行するときに、いしが行狀を委しくかたりければ、盛之、みづから、いしが家を訪ひて、親しく、その寒苦のさまを看て、詩に作り、藩主にも申して、いしが一生の間、地下の賦役を免除せられ、年々、米一俵あて下さるゝことゝなりて、この外にも、時時、賞金等をも給ひ、剩、平民には類稀なる姓氏を給ひて、門閭に旌表せられけり。また、本願寺の寺主も、之をつたへ聞て、門徒の摸範ともなるべき者なりとて、染筆の法名、かつ、菓子等を給ひけり。その後、伊八も亡くなり、いし、ひとり、七十餘歲まで長らへて、文久三年に死せしかば、元治元年に至りて、碑を路の傍に建て、その行狀を記し、芳蹟を遺されけり。いしが隣に、熊といふ女あり、いしが行狀を見ならひ、父母に孝養を盡しけるは、全く、いしが德、孤ならざる驗といふべし。

家政

育兒小言（三十八）

武谷水城

居所幷伴侶の事

昔の人の語に、居は人を遷すと云へり、此言、事實に徴して、毫しも過らず、固より家裏の感化と敎養とは、人の性行の根脚を爲すとは雖、小兒の内は、其根脚猶未だ堅固ならぬが故に、亦他物の爲めに遷さるゝ事少からず、中に就て、居所と伴侶との、良否如何に依りて、左右せらるゝ事、亦甚大なるものなり。

居地の習俗卑しく、伴侶の風儀悪しき時は、折角母親の丹誠に依りて、漸く小兒の心田にめぐみし善良の智の芽も、いつしか、其色を替へ、中には全く悪種に變ずるものも、無きに非るべし、居地の習俗、純美に、伴侶の風儀も善良なる時は、小兒心田の善種は、益其芽を長せん事、猶潤雨の早苗の成育を助けて、其緑色を增すが如くなるべし、

居を撰び、伴を擇ぶの、大切なる事は、浮世の事物の爲に、已の心を移されぬ聖賢の人すら、いたく誡め、自をも警められし事深し、腦力弱く、實歴なき小兒に在りては、猶更の事なり、海邊にて成育せし童兒は、習はずして能く游泳し、嶢斜の地

に人と爲りし女兒は、梳粧自然に妓流に似る、市に舍すれバ、嬉戲にも自ら衒賈の事を爲し、學官の傍に居れバ、自然に揖讓進退の禮節を習ふ、此くして、目に觸れ、耳に聞く處のもの、次第〻心に感じ、身に染みて、終には善惡、正邪、共に其性行の一端と爲る事なり、孟母三遷の敎の、千載育兒法の鏡と仰がるゝ所以のものは、他なし、亦只居所と伴侶との、感化の力至大なるを知りて、能く其撰擇に意を盡したるが故のみ、

總じて人の天性中には、必ず他人の行爲を學び倣ふの質あるものにて、常に其接する人の、動作、姿勢より、甚しきは思想、容貌、に至るまで、知らず識らざるの間に、似る事にて、特に少しまても、己の尊崇し心服する人に接する時は、其摸倣の力は甚大なるもの也、就中、小兒は毫も實歷實驗なく、自己の判斷力甚乏しきものなれバ、其接する處の人と物とは、皆行爲思想の師表と爲りて、左かも其力は甚强大なるもの也、特に自分より年長の兒に對しては、善惡是非の別なく、大抵服從して、終には已れも亦其行爲に倣ふものなり、總て此等摸倣の力の、强く深きは、身の成長の時特に小兒の時を第一とす、されバ、居所と伴侶との、注意と撰擇とは、家

裏の感化慣習と、學校の教育とに次で、大切の事柄と知るべし、或人の說に、善良の伴侶は、人の天性の滋養物なり、此滋養物を得て、成長したる小兒は、後亦自然に、他兒を滋養（感化）して、善良の性質と爲すと云へり、言亦味あり、居所を撰ぶと云ふ事は、家内の感化慣習を謹むが如く、自己さへ注意すれば、出來得らるゝものとは事かはり、特に中以下の家にありては、種々の事情もありて、思ふ様にはなり難き事なれども、居は能く人を遷し、能く人を成す事を忘れずして、日常育兒の上の注意を怠らぬ事、肝要なるべし、伴侶は多くは、自然に居所に伴ふものなれども、居所に比すれば、其撰擇は容易なるべし、但、伴侶とは、獨り友のみを謂ふに非ず、玩具、遊器、書籍、圖畫、の如きものも、皆小兒の伴侶なり、此等の器物の注意方は、前に述べ置きぬ、幼時常に、家室に掲げありし偉人の畫像を、觀之に感化せられて、有爲の人と爲りし例もある事なり、

家政雜事（七）

鳬を損せぬ様に保方

鳬を遠方に贈るには、嘴に山葵をさし込、外を綿にて包み、風の徹らぬ様にし、紙袋に納て糊にて封ず、腸など取捨つべからず、少も疵を付くれど保ず、故に網、もちなどにて捕れる、鳥ならではかいなし、鳬ならずとも他鳥も保つべくや、此は加賀人淺井主水が物語也、加賀より京都に贈るに、日を經ても損じ腐る事なしといへり。

（故小山田與清）

漫録

沖繩縣下旅行日記（三）

まよ〱主人庵

十一時、銅鑼鼓の聲うちしきる。さらぞとて、綱引見にゆく。前の少年、集り居たり、炬は、晝をもあざむくべかりなり。老人さへ來りあひて、少年等に手遣、捧遣、或は、押合の稽古せさせさてはわろし、かくするものぞなど敎へさわぐ。村役人の何某とかいへるものなどは、今日になりても懶怠くるかとて、燃えかけの炬にてたゝきありく。傍には、少き女どもうち集り、各々に、大鼓を頭よりも高くさしあげてたゝき、歌をうたひをどりて、わが方の勝たむことを神に祈り、かね

て、少年に勢をつく。その所のさま、總べて、戰爭になど出で立たむずるやうにて、いと勇しく、萬のことも打ちわすらる。聞えし歌二三を擧ぐれど、

後　少年網作る夜や上て見る月疊て給り、
り網續口に落穴掘りて後少年其處に落せ、前の
嫁爲後の網引せ草履々々擇糞草履踏せ、

時、來りぬれば、棒の先に網の頭を高くさしあげ、鯨波をつくりて、その場所にねりゆく。少女どもは、大皷をうち、調子をとりて、後より來たがふ。前後とも、到着すれど、少女どもは一壓となりて、互に、わが方勝てよとをどり狂ふ。こなたには、前後の少年頭、捧を戰はす。前の少年頭は、丈は少し高げに見ゆれど、年のころは十三四歳、まだ、十五は越えざるべし。顏の色、飽くまで白く、鼻すぢとほり、かくやうのことは不似合しげなり。出であひし後の頭は、年は同じ程なるべけれど、顏の色黑み、筋骨ふとやかにて、强げに見ゆ。いざいざとて、打ち合ふと見れど、わざに於きては相違もあらじ。一上一下、虛々實々。かくいへど、われ等が、小說など書けるやうにて、ことさらに、捏造する如く聞ゆれど、打ちあふおとのすさまじさ、これや眞の劍ならど、切先より火花散りぬべし。疲れたらむと思はるゝころ、殘の頭二人いでゝ、手をたゝかはす、耳のあたりを見がけて突込む手を、左手に拂ひさま、右手にて敵の横面をうつ。實に、見る目も危き戰なり。かくして、互に、出で合ふこと七八回、そ

の他の少年、又、七八回、やがて、兩軍、入り亂れ、一團となり、エ、ゝ聲出して押し合ふ。さて、これより、綱引なり。双方人數、綱を捧げいだして合す。合せ目には、太き丸木をさして楔とす。老人だちのかけ聲を合圖として、ひきあひはじむるなり。少年等は、汗拭く隙もあらむこそ、したゝる汗を、流るゝまにく\、口に入れて喉を潤し、鯨波をつくりて曳きあふ。この時、少女どもは、大皷をおき、かバ團扇をとりて、わが方の少年をあふぐ。母、祖母などは、厭はしげにそむくる顔の汗を無理に拭ひやるもあり。あるぎながらに、わが孫子に力を添ふるもありき。今夜は前の方、勝ちぬ。楔の捧とりたるは、勝ちたる證なり。その捧をふりあげて喜び狂ふ。少女は、再、一所に集りて、かく、勝負つきぬる上は、うらます、はこらず、もとの如く快く交せむとの意をうたひをぞる。今夜のありさまにては、明日は、いかなるさまで顔あはすらむと、危みて問ひけるに、あらず、この勝負のことは今夜かぎり、思はずと答へき。愛でたき習慣なり。歸りて寢につきしは、子時すぎなりき。

十八日　小學校を參觀す。幼き女の子の、頂まり珠をかけたるあり。涼珠を糸に貫きたるなり。これは、十四五歲まで、富める家の女の子等は、十七歲までも、かくと。古くは、老女もかけたる由なるが、今は、唯、若きものが、これかくれた、涼しとてかくるなりといへり。午後、こゝたちて、北谷にゆく。今日は、こゝ、新米節日なり。この

節は、農家にて、新米の出來しを祝ふため、村中の都合よろしき日を撰び、一般に、米の飯を炊き、先、祖先の靈に捧げ、次に、親族に分配し、さて、家の人々食ふなり。又、家の子等が、守傳せし女にて、夫持ちたるにも分配すといふ。今夜、網引わりとのことに、ゆきて見たれど、さて、用意もなく、男どもは、唯、うち集りて煙草燻らし、得も知らぬ雜談などし、女ども、、大鼓は打てど、唯、わが樂にするやうなり。雨降りて、遂に、行はざりき。中々にうれし、かゝる輩の網引見たりとて、何のおかしきことやあらむ。さはいへ、それも無理にはあらじ、かゝる節日にても、農夫は、業を休むにはあらずと。一年の中にて休む日とては、正月一日、二日、二月の祭日、四月のアブシバー、五月の五日、同月の祭日、六月の祭日、七月十六十七の兩日十二月八日、ムーチーの節に休むのみなり。このムーチーの節に由來あり、昔、内金城村に、男女二人の兄弟ありき。如何なる業の果なりけむ、弟は、人を食ふことを好みけり。姉、深く、これを憂ひて、十二月八日の日、餅を作[redacted]口は、鬼を食ふ所なり。弟、驚き、斷涯をおやまり落ちて、遂に、死せきと。これ、即、由來なり。何等の痴人が、眞面目に傳へ殘しけむ、王代記どいふ書にも見えたり。この日は、クバの葉を軒につるゝ、さて、福は内、鬼は外と三遍となへて、

それに、餅を煮たる湯を灌ぐと、内地の、五月の節句と、節分とを合併したらんやうのものなり。

十九日　又、こゝの小學校を參觀す。女生徒在籍、廿六人なれど、一人の昇校せしものあらざりき。作文科に、白紙といふ題を與へられて、シドゐカミと書きしなど、例のとをかしかりき。數學科の題に、或人、商法ナセシニ云々、何圓ヲ利シ、元金合セテ何圓などかきつけられき。午後、白比川にて水泳、歸路、北谷城に晝ねして歸る、北谷城、或は、大河城ともいふ。番所の北、一町ばかりの所にあり。いつのころか、大河案司といへるもの、據りし所なりといへり。あとかただに見えず。

三卿三説（つゞき）

松野操雄

又、歌の大事は、詞の用捨にて侍るべし、詞につきて、强弱大小俟ふべし、それを、よく〳〵、見えたしめて、つよき詞をぞ、又、一向に、これを、つらね、かくのごとく、案じ返し、案じ返し、ふとみはそみもなく、なひらかに、聞にくからぬやうによみながすが、きはめたるをもき事にて侍るなり、申さば、すべて、詞にあしきもなくよろしきもあるべからず、たゞ、つゞけがらにて、歌詞の勝劣はべるべし、幽玄の詞に、拉鬼の詞などをつらねたらんは、いと見ぐるしかるべき事にてそ、されど、心を本として詞を取捨せよとこそ、亡父卿も申しおき侍りしか、或人の、花實の事を

歌に奉りて、申して侍るにとりて、古の歌は、みな、實を存して花を忘れ、近代の歌は花をのみ心にかけて、實には目もかけぬからと申すめり、尤、さとおぼえ侍るうへ、古今の序にも、此の心侍るならん、さるにつきて、猶、此のしたの了簡に、愚推をわづかにめぐらし見侍れバ、心得べき事侍るにや、いはゆる實と申すは、心、花と申すは詞なり、必、古の歌の詞は、つよく聞ゆるを實と申すとはさだめがたかるべし、故人の詠作にも、心のなからん歌をバ、無實歌と申すべき、今の人のよめらんにも、心のうるはしくたゞしからんをバ、有實歌とぞ申し侍らん、さらぞ、心をさきにせよとをしふれバ、詞をつぎにせよと申すに似たり、所詮、心と詞とをかねたらんをよき歌とは申すべし、心詞のふたつは、たゞ、鳥の左右のつバさの如く成るべしとこそとぞおもひ給ひ侍る、但、心詞の二ともに兼たらんはいふにをよばず、心のかけたらんよりも詞のつたなきにてこそ侍らめ、かやうに志るし申し侍れバ、又、誠に宜き歌の姿とは何を定め申すべきやらん、誠に、歌の中道は、只、みづから、知るべきにて侍るなり、さらに、人のこれこそと申すにあるべからず、家々にたつる秀逸の體、まち／＼なり、俊惠は、たゞ、歌をぞ、おさなかれと申して、やがて、我が歌にも、その姿の歌を秀逸とおもひけるとかや、俊頼は、ねもいはずたけたかきを宜しと申したためり、其外、品々に申しかへてぞ侍る、さらに、短慮及がたくぞ覺ね侍る、なにも志れバ、あながち

に、大事になり侍るならひなれども、ことに、此道は、さと覺え侍り。わが心の中にも、歌の昔今をおもひ合せて見申すに、古よりも、當時は、ことのほかに、よむ歌ごとに、わろくのみこそ覺え候へ、これはと思ひていだすは稀にぞ侍る、わふげせ、いよ〳〵、たかき事に侍りけりとぞ、先哲の庭訓も、今こそ思ひしられて侍れ、先、歌に秀逸の樣と申すべき姿は、萬機をもぬけて、物にとゞこほらぬ、歌の十體の中のいづれの體とも見えずして、しかも、又、其姿を、みな、さしはさめるやうにおぼへて、餘情うかびて、心なほく、衣冠たゞしき人をみる心地するにて侍るべし、常に、人の、秀逸体と心得て侍るは、無文なる歌の、さは〳〵とよみて、心すぐれ、たけのあるをのみ申しあらひて侍る、それは、不覺の事にて候、か、ゝらん歌を秀逸とだに申すべくは、歌ごとにもよみぬべくぞ侍る、詠吟事極り、案情すみわたれる中より、今とかくもてあつかふ風情にてはなくて、俄に、かたはらより、やす〳〵とよみ出したる中にも、いかにも〳〵、秀逸は侍るべし、其の歌は、まづ、心ふかくたくみに、詞の外まであまれる樣にて、姿けだかく、言葉なへてつゞけがたきが、しかも、やすらかにきこゆるやうにて、遠白く、かすかなる景趣たちそひて、面かげたゞならず、氣色ばみて、さるから、心も詞もそゞろかぬ歌にて侍る也、是をバ、わざとよまんとすべからず、けいこだにも入り候へぞ、自然とよみいださるゝ事の候、又 古の歌にも、今の歌にも、よにいひお

はせられぬやうに聞ゆる事の侍るなり、さおぼゆる事は、いかにも、初心の程ぞ成るべし上手の、わざと、これまでと詞をいひさす事、これ已達の手がらにて侍るべし、それをうらやましとおもひて、學びもえぬ物から、未練の人のよめるは、何にもつかぬかたはらいたき事にて侍る、大かた、歌にうけられぬは、秀句にて候、秀句も、しせんに何となく、續出せるはさてもありぬべし、いかがせんと、とかくたしなみよめる秀句が、きはめて見ぐるしく、みさめする事にて侍るべし、又、本歌とるやうは、さきにしるし申候ひし、花のかたをやがて花によみ、月をやがて月によまんことは、達者のわざなるべし、春の歌をば、秋冬などによみかへ、戀の歌をバ、雜や季の歌などにて、しかも、其の歌をとれるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候、本歌の詞を、あまりにおほくとる事は、あるまじき事にて候、その中に、詮とおぼゆる詞を、ふたつバかりとりて、今の歌の、上下の句にわかちをくべきにや、たとへば、夕ぐれバ、雲のはたてに物ぞおもふ、あまつそらなる、人をこふとて、と侍る歌をとらば、空のはたてに、物ぞおもふといふ詞を取て、上句下句に置きて、戀のうたならざらん雜や季などによむべし、此の比も、此の歌をとるとて、夕ぐれの詞をもとりそへてよめる類ひ侍り、夕ぐれのなどやらん、取添へたるも、わしくも聞えず、めづらしくせんとおぼゆる言葉を、さのみとるが、わろく侍るなり、又、餘に幽かにとりて、そのうたにてよめるよとも

見えざらんは、何の詮か侍るべき、なれど、よろしく、これらを心得てとるべきにてこそ、

道のしをり歌あはせ

久志本常幸寄贈（一）

左に掲ぐるは、門田の早苗に、よう似たれど、また異なりて、愛でたきふしもなきにあらねば、これより、つぎ／＼ものせんとす。

道のしをり歌あはせ

津阪孝綽撰

こは、家のわらはめによみならはせて、かたつぶりの角のをさな心をも振起し、玉鉾の道のかたはしをわきまへさせむ庭の訓にせまほしくて、いにしへの名たゝる歌の数となし、誡となすべきを、おもひよれるまに／＼、ひろひ集めて、しどろもどろにたぐひをもて、つがひ合せつるなり、むかしの、からうたの章をたちて、義をとる例になずらへ、花鳥のたはれとをも、をしへの道にとりなしつ、そが中に、かならずしも、女の道にあづからぬもあれど、ゆく／＼、人のつまとなりて、夫をいさめ、子をおふしたつる便になりなんとおもはゆるは、まゝ、ちなみにしたがひて、えらびくはへたり、はた、おなじ意の歌を、継番も、くさ／＼かさねつらぬるは、いたづがはしきに似たれど、まめごゝろのせちなるくりかへし、ねもごろに諭さんがためぞかし、これも、むかしのからうたの例にならへるなり、さるにても　わがしきしまの道のことの葉は、いとよく、人の心をうごかしみちびき、

とさねぐ、唐さへづりの、かぞらしき語もて、こちたく、いましめんよりは、殊に、ふかく、心にしみて、すゞろに、めでつるものなれど、をみなごゝろのおろかなる、難波津のなにとわきまふる所なく、浅香山のあさはかよ、つたなきも、おのづから、なさけにめで、哀にみちびかれて、心にかゞみ、行をつゝしむべき、道の柴折となりなまし、こひねがはくは、朝な夕なに、をこたらず、ひたすらに、よみまなびてよ、

ひとすぢに人をも身をも思ふかな
　うつすみ繩のすぐなれとのみ

何事ものりをこね行く世のひとの
　こゝろにかたき關もりもがな

人のおこなひ、道にしたがひて、事ごとに、かうぞまもりなど、世にめでたきとのかぎりならまし、さるに、ゆくべき道をゆかずして、あらぬ方にふみたがへもてゆくもの、、世におほかるはなぞ、

人とかく生れつく身のうれしさを
　いたづらになす我がこゝろ哉

わりなしや人こそ人といはずとも
　みづから身をや思ひすつべき

ありがたき人にうまれたるかひもなく、あたら、世を、いたづらに、すぐさんはくちをし、たとひ、うまれつき、つたなく、人におとるとも、やはか、心ざしをはふらしすつべきかは、

世の中は千種のはなのいろ／＼に
　心の根よりなるとこそ聞け

おそくとく己がさま〴〵咲く花の
　ひとつふた葉の春のわかくさ

世の人のしな、さま〴〵なりといへども、おほやう、性は相近し、習はしにつれて遠しとなん、されど、人の親たるもの、子をおふしたつる道をおろそかにせず、つとめて、よき師、よき友にしたがはしめて、いと氣なきより、心の德を正しくやしなひ立べきとなんめり、

かたちこそ深山がくれの朽木なれ
　こゝろは花になさでなりなん

植ゑて見よ花のそだゝぬ里もなし
　こゝろからこそ身は賤しけれ

しなかたちこそ、生れおとるとも、心は、などか、かしこきにうつさばうつらざらん、

しら露の色はひとつを如何にして
　秋の木の葉をちゞに染むらん

時の間にあらしぞさそふ日數へて
　しぐれも露もそめし木の葉を

はじめのうたは、敎によりて、いかやうなる人にも成立べきをいふなるべし、後の歌は、十日あたゝめて、一日にひやし、善にしたがふは、登がごとく、悪にしたがふは、崩るがごとしの戒になん、

昔へやいかなる繩をむすび置きて
　今もその世のことを知るらん

鳥の跡にのこるを見ても代々の道
　とびたつばかりむかし戀しき

いとまだにあらば、ふるき書ども見そなはし

て、いにしへのかしこき跡をもとめ、おろかなる身も、道のすぢをわきまへつべし、おなじく一雙の眼を具へながら、いたづらに、わきめくらにてすぎはてゝむは、恥かしく、くちをしからずや、さりながら、女は、かならずしも、唐文字は讀みえずともあらなん、たゞ、ものかくとの手づゝなきは、むげに、あさましう見ゆ、つとめて、よく習ふべきわざなり、阿佛尼の、安嘉門院へまゐらせしいさめの文に、手は女の本たいと覺さふらふ、さがなき筆のすさびにて、人のほども、こゝろのうちにおしはからるゝ事にてさふらふと、いましめられし、げに、手のさまにて、その人をおもひおとりして、うたてくおぼゆるものぞかし、いと恥べきことになん（つゞく）

老の心（續き）　松竹居主人

螽斯の繁榮、やがて出生よりなん、其の出生の賢ならば、父祖の業を續ぎて、國益盛に、四民其の德に浴しなん、若、不賢ならば、父母の業をおとし、國もおとろへなん、四民も其の德を失ふべし、恐れざるべけんや、古には、胎敎よりして其の敎あり、まして出生の上は、幼稚のもの、辨へなき内より、敎育が大事なる事なれば、穴かしこ、如在におもはれまじ、其の敎育の仕方、是又、古人の敎詳にあれば、其の人に問ひ求められよ、大室先生の、子を敎ふるは母を敎ふるにしかじと、常に申されしは格言とこそ思はる、人情、子はいとをしく可愛きものなり、まして母の上は慈愛深きも

のなり、往々愛に流れやすきぞ、孟母を始として、世々の賢人君子といはるゝ其の人の母は、必賢母也、賢母の其の子を育つるは、其の愛に流れざるなり、愛に流れざるは、實に其の子を愛するにこそあれ、愛に流るゝは、實は其の子を愛せぬなり、夫をいかにといふに、母として其の子の才徳あらんことを願はざるはなし、されど、眼前の愛に忍べで、目長にして、其の教方の行屆かで、終に、驕傲の性を醸しなし、不徳不才に至らしむるなり、是を能く其の子を愛すといふべきや、可愛い子に旅をさせよといふ諺は、即愛を殺げといふ教なり、然らば、慈愛は尤深かるべき事ながら、其の慈愛に流れたまはで、其の年頃の育て方に心を用ゐられ、附々の者共を能く喩されよ、

一與向の事、彈正殿(治廣侯)教示あつて、即其の教に隨ひ、質素を守られし事、當世には類稀なる事と、常々感じ入りし事共なり、但此節の事は、邊鄙の田舍にて、誠に手狹き事なり、是より大都會に出られ、繁昌美麗の有樣を見聞れなば、何程か驚かれなん、其の始は驚かるべきなれども、末に至らば、其の美麗に心移り、羨む心生ずるものなり、其の羨む心生ずる後は、いつか其の華麗をあしく思はざるは人情にて、質素がいやらしくなりて、是より奢侈風流にも移りゆくもの也、此の處の覺悟其の始に居らねば、既に我が心一度動きし後は、中々半途にて立歸る事は甚むつかしき事也、扨當家の事は、家柄と云ひ、家格と云ひ、當時の大諸侯、いづれにか恥劣るべきにあらねども、往々

小祿になり、殊更寛文の頃、不幸にして領地半を減せられたり、然りと雖、家臣は皆以て其の以前に替らず扶助し給ふ事、寔に先君の善政忝きといふも中〳〵おろかなる事なり、楚國には以て寶とすることなし、惟善以て寶とすとかや、府庫に幾多の名器珍寶ありといへども、何ぞ此の家臣の濟したる寶にしくものや有べき、されども、領地に過たる家臣扶助あると、家格重うして大諸侯に列なるとにて、財用乏しく、撫育思ふまゝに成らざる事は、追々聞及ばれし如くなり、因ては、彈正殿式部殿、斯く迄節倹を用ゐられ、身廻りの艱難不自由をもいとひなく、唯々四民撫育の事のみに心を盡し申さるゝ事、是又朝夕見聞るゝ如くなり、故に大都の華麗繁昌の有様には似ても付かぬ事共なり、年若といひ女子の心よりは、時分からの衣服など、嘸少しは氣の毒にも思はれなん、是又もだし難き人情ながら、是に少しも心動きて、是迄の質素の風儀を失はれん事ゆめ〳〵有べからず、終わる事少しの戒を畏れおもはるべき事なり、然れバ、いづく迄も、是迄の風儀質素の風を取守られ、養蠶女功の事に心を盡し、常には和書歌書などを以て心を養はれよ、博覽を貪り、歌人にならるゝにも及バず、凡學問は、本此の身を修る道を知らん爲なれバ、和書假字書物にても、女の教戒を書記せしもの數多あり、是等の内より、今日へ推しあて、善を修し惡を誡められよ、和歌を翫べバ、物のあはれを知る事も深く、月花に對し興深く、自然と心ばへ卑劣ならで、大に性情を養ふ助

となりなん、前にもいふ如く、御身は稀なる幸福を得られし事なれバ、此の幸福を常に惜み愼み、いつ〳〵迄も質素を守られよ、愷悌の君子は民の父母といへバ、頓て式部殿には此の國民の父なり、御身は此の國民の母ならずや、式部殿四民を子とし敎られ、御身は四民を子とし愛せられなバ、此の國の四民も、御身二方を父とし母とし戴きなん、かゝる樂しき事外にあるべきや、されど其の子の爲にする艱難は物かはなるべし、

一御代々の奥向は、皆他より入輿あり、世の習俗、皆家風をその儘にうつさるゝなれど、其の風儀格式も區々なり、御身の事は、此の國に生れて此の國の君夫人に立るゝなれど、此の家の風に違はれては本意に非るべし、呉々も御兩親へ事られて、御兩親の心を安んじ、式部殿に順從し給ひ、幽閑貞靜の德を積み、夫婦むつまじく、螽斯の繁榮限なく、我が國の賢夫人と仰れ給へかしと、首途に臨んで千秋を祝し、且は婦德を望む、祖父の心中汲量られよ、他へこそ行かれねど、今日より後、いつ相見るべき期をしらざれど、嗚呼名殘をしくこそおもひ侍れ、

治憲

武藏の江戸なる館に趣き給ふはなむけに

春をゐて花すり衣かさぬとも
我がふる里の寒さわするな

（畢）

門田のさなへ（つゞき）

たまくらの、すきまの風も、さむかりき、身はならはしの、物にざりける、

これも、さきの歌に合せて思ふべし、玉樓金殿にありし人の、世を捨て、行脚の折によみ給へるとか、げに、身はならはしのものにて近き天明の末、京師の大火にあひて、家も倉も一時の烟となし、恃むべき所縁の人々も、またひとしけれど、いかにともせん方なく、辛うじて三日五日を過ぐるほど、たつぎに侘びて、餅やうのものを焼き、路の人に賣りてありくが、業にも似ず、いとよききぬ着たるがありしと語る人侍りしは、かくても、經ぬるよにこそありけれとあはれなりき、又、京師のある豪富、物に乗りて、江戸へ下る時、京よりめしつれたる輿夫が手代りに、是を舁く者あり、ふと見合せたれば、もと同じやうに富んで、折々は、交はりし人なり、こはいかにと思ひて、詞をかけたれど、彼、さのみ恥かしとおもふ氣色もなく、ふりぬることども語らひしついで、ぬしは、殊に奢りて、夜、寐るにも、夜のもの、身におもきをいとひて、釣夜着といふものをさへいとなみしときくに、今、人の乗りたる物舁くは、いかに堪ふるぞと問ひしかば、笑ひて、時々にて、重き荷をもかつぐに愁ひなし、江戸へ通す長持やうの物あらば、われにおほせ給へといひしと、或智識の隨筆に　身はならはしのもの也といふ誠にかゝれしとなん、善きも惡しきもならはしにて、ならぬといふはなさぬ也けりともいへり、然れば、ならはしといふことを心得て、善事になれ、惡事にならら

はぬやうに、心を用ゆべし、又、ならはしといふことをしらば、富にならひて奢りたきも、いなや、これは、わが心のならはしのわろき也と省みて、貧しく哀しき人を思ふべし、ならはしをよく心得ば、堪忍のためにもよき師也、といふべし、をさなき人のならはしは、育てがてらによるといふ事をも、親なる人よく心得べし、此ごろは、富商の我儘病を癇症と號けて、朝暮、藥に漬かり、導引に身をゆだね、勤めといふ事かなはず、よろづ懈りがちに過す人あり、仕官の人、貧しき人には、かつてなきことなり、これらも偏にならはしのわしきにて、わらぬ病を引き出せる也、

あまの刈る、もにすむ虫の、われからと、音をこそなかめ、よをば恨みじ、

わがあやまちによりて、世にわり煩らふやうになり行く人は、もとより、いふに及ばず、或は、幼なうして父母に別れ、睦まじく賴むべき人もなくてさまよふ人、或は、家衰へ、愁ひ多きやうの人もあり、さる人は、此のうたを思ふべし、われからといふ虫は藻につきてある也、其の藻をいはんとて、海人の刈るとは置きたり、さて、其の名によせて、われからといふ、からは故也、われ故にてこそあれ、世をば怨みじと思ひかへしたるは、殊勝なる歌也、たとへわれがあやまちにはあらでも、吾が身につきてうけ得たる運によることをいかゞはせん、これを、儒家には天命といふを、佛家には因果といふ、前生の因によりて、今生にうくる果、かくのごとしとなり、されば、また、

何ごともむかしの故とおもはずば
　　いかに此の世を恨みはてまし

ともよめり、昔の故とは、前生の報をいふ、若、さか思はずば、いか計、此のよを恨みはつべきと思惟せるは、即、天をも尤めず、人をも恨みざるにて、誰も、かくぞあらまほしき、女の上にていはば、其の夫の心ばへつれなきや、舅姑のひすかしく、かだましきなどにあひても、常に、此の歌どもを思ひて慰み、唯、おのが心をまめやかに、身をまさしく守るべし、

あふ坂の嵐の風は、さむけれど、行くへしらねばわびつゝぞふる、

逢坂山わたりに住める隠士のよめるなるべし、或説には、蟬丸の歌といへど、古今集に、題しらずよみ人しらずの歌なれど、證なきことをいふべからず、歌の意は明らか也、此の山風の寒しとて、浦わに行かば、又、波の音やかしかましからん、市中に行かば、塵のまよひやうからん、然れど、行くかたも〳〵、同じうき世なりと思ひ回らしゝて、わびながらも、有のまゝに世をふる也、心定まらぬ人の、かくせばよからんや、させばいかならんと、さま〴〵にくるひまはれど、吾が身につきたる運は、轉ずべからず、さきの歌どもにあはせて、あふ所にやすんずべくこそ、

光なき、谷には春も、よそなれば、咲きてとくちる、物思ひもなし、

時なりける人の、俄に、時なくなりて歎くを見て、自の、歎きもなし、悦びもなき事を思ひてよめ

ると詞書ありて、清原の深養父のよめる也、げにも、時めく人の、思はず時を失ひたるは、いか計、苦しく思ふらん、又、人めもあぢきなし、されど、時めく時は、しりへを省る心はなきものにて、或は、君の寵を得れど、あたりには人なきが如く思ふ、或は己が才にて富めるやうの人は、貧しきは、皆、愚なりと見下すなど、古今の間、大方の人の病也、されど、花の咲き滿ちたる如きは、疾くちるならひにて、誠には、常磐木の如く、めにたてゝ見るべき光なきものは、うつろふ憂もなし、前に譽あらんよりは、後に誹りなきこそめでたけれ、

妾に送りし文

こは、信濃國飯山町にすみける人、飯山より長野に來りすめり。されど、老母の病めるがありて、其の妻は、夫に隨ふこと能はず、故に、夫に請ふて、かねて、知れる女を撰びて妾とし、長野なる、夫の寓所につかはして、後に、妻のもとより、妾におくれりし文なり。こゝに掲げて、人の婦たらん者に示す。

おなじ木のもとにあひやどりし、おなし流を結ぶも、みな、さきの世よりの契といへり、そなたとわが身は、いかなる宿世の緣にか、そなたより親とえたへバ、こなたにも子と思ひ、不便もまさりて、長く、辛氣をこらへ、やう〳〵と同じ君に仕へ奉ること、いとも嬉しき事に候、去りながら、此の末、わが身とそなたの心ひとつにて、勿體なくも、

君の御名に疵のつく事に候へバ、必、あけくれ心をせめて、中睦じく、よく勤め賜ふべし、ふつゝかなる吾が身ながら、申す言葉を捨てさせ賜はず、そなたをすゝめ奉りし事を御用ゐ被遊候ふて、かやうに相成候ふ事なれば、これよりは、世間の人々にも、何がしの内は、妻妾あれども、波風たゝず、むつまじく、めづらしき事かな、是、全く、旦那のをしへよきゆゑと風聞ある樣に致し候ふも、みな、兩人の胸にある事に候へば、何とぞ、心にへだてなく、もし、心配の事ある時は、わが身につたへよ、むかしより、本妻とてかけとの中、婦と姑との中のたがひめの事、あげてかぞへ難し、すでに、飯山にも、何かしさまの御宿にては、今、本妻とてかけの中むつかしく、不和のよし承はり候ふ、これ、その何がしの事にあらず、皆、そなたとわが身のよきてほんに候へバ、必、心を盡し、いつも立派に、人々、いつみても機嫌よくくらすといはるゝ手本と相なるべし、これ、人にならふに及ばず、兩人のむねにある事なれバ、此君の御もとにつかへ奉らんとおもふ一念をわすれ申すべからず、當御時節は、下人もおほくは暇を出し、わが身をせめて朝ゆふの炊ぎも致し候故、人、鍬を持ちたまへバ、出來ぬまでも、われも鍬をもち申すべし、我もてば、そなたも持つべし、いづれにも、女子は、嫁しても安き心はなきものにて、めいめいに、苦勞のなきといふは御座なく候へバ、そのつもりにて、御互に、迚も暮すならば、心おもしろく世をおくりたし、わが身、むりにそなた

を呼びよせ候ふ事ゆゑ、心がけわしく、わだに月日を送るやうの事候はゞ、必、そなたゆゑに、我身もいかにせん、何とぞ、是迄、不便をかけて、こなたへ呼びよせ候ふ恩をわすれ申さずど、君を大切に致したく候へかし、申すまでもなく候へども、いかやうなる御仰事候ふとも、必、言を返さず、又は、返事はいたしながら早くたゝぬは、誠に見ぐるしき事なれど、身を返事と一所に立て、御用のすぢ承り候へ、扨、女と申すものは、馴るゝに隨ひ、心ゆるみ、仰事も、わが氣に入らねば、御返事も墓々敷致さぬやうになる物に候へど、決して〳〵、左樣なる我がまゝを致し、我身に迷惑かけ申間敷、馴るゝに隨ひ、禮義たゞしく仕へ奉るべし、ふだん、みだらに暮し候時は、自然と、

人樣御出の時も、その風みえ、われは、主人の氣にいりなれど、いかやうにしてめすむといはねばかりのそぶり見えて、そのみにくき事どもは、君の御恥に候へど、わくまでも、禮儀たゞしく、よく仕へ奉れど、人、皆、君をはめ、そなたをもをとなしき女子とはめ申すべし、其の時は、我も鼻を高うして、いとゞ嬉しく悅こびしく、何にたとへんやうもなかるべし、やどには、君旦那ひとりにて、二男は、わが身の里方へ遣はし候へど、心ぼそく、何とぞ、心をすなはに持ちて、よき男子を、はやく、うみ、賜ふべし、われ、深く、いつくしみ、大切にそだて申すべしど、ろれのみ樂しみに致し候、必々、身おもく相成候ふても、隱し、人忘れずすべらかすべからず、君の御たねを、われ、

何を以て、心あしく思はんや、もとより、その心づもりにて、そなたをおすゝめ申せしなれバ、我に任せ、そだてさせ候へど、世の人、それに歸服して、あしき風聞は致すべからず、實に、そなたとわが身の中は、かくまで思ひ思はれ候ふ事、不思議といはんか、あやしき事ならずや、是ほどの中なれども、互に、嫉妬の念あるときは、段々と、年月かさなるに隨ひ、つひに、隔、出來て、大なる耻となる事なれど、女の第一つゝしむべきは、嫉妬の念なり、去せん、そのふりを見せ、君にうとまれ玉ふまじく、先頃、御足の御痛より、また〳〵、御風氣のやうに承はり、いとゞ、御案じ申上參らせ候、御心あしき時ハ、猶更、大切に、何事も仰のまゝに仕へ奉るべし、ふだんの御氣性ゆゑ、とかく物に凝りたまひて、根氣つかひたまふ御氣質に入らせられ候へど、御召上り物も心づけ、あしき品は、御とめ申して、決して、あげ申間敷、御酒は、少々づゝは、御からだの御くすりにもなり候はんとぞんじ候へども、多くはめし上るまじく、是は、そなたより申上候ふて、深く上まじく、又、たれかれに限らず、御つかひ被遊候ふ者は、よく〳〵心をつけて、深切をつくし勤め申すべし、人の過は、我が身に引うけ、御詫申し上ぐべし、わが功は、人に讓りて、君に申上候ふ樣に致候はゞ、その情深き意をありがたく思ひて、みな〳〵、服し、身に禍もある事なかるべし、必、わが誠、心にとめ、失念いたすまじく候、約束のからし漬、木の子、そのほか、ねぎ、

今日、おくり候へバ、受取可申候、けだしと袖なしは、少々、間にわひかね候間、跡よりおくり可申候、それまでは、わろき着物を下にきて、風ひかぬやう、用心いたし可申候、羽織は、われ、亦、旦那様へ御願ひ申上候間、そなた、見たて候ふて、こしらへ候様致すべく候、扨々、若き女子と申すものは、世話しきとても、湯てうづは怠るまじく候、急に、御客様ある節、是は、宿よりおり候ふめしつかひなりと仰せられ候ふても、さもしき顔を見せたくなく、第一、旦那様を敬ひ奉り候事は、身仕舞致し候ふを、敬ひの一つとは致すものと、昔の人の申しおかれしなれど、左やうに心得有るべきなり、そなた、おそバに居候ふゆゑ、此表にをり候ふても、誠に〳〵、楽々としたるこゝち致し、悦びをり候、此上は、不調法のなきやう、つゝしみ勤め申すべし、是、何より、私へたいしてはうれしく候、云々、かしく、

女畫師

其四

乙羽庵主人

京童が謡ふ小唄に、目出度〳〵の若松様よ、枝も榮えて葉も茂げると、祇園の三絃

に乘る程の勢力は、京都に守護職を置かれてよりの御繁昌、公方樣の御連枝とて、豪らいものぢやと、贅六が肝玉を冷やせるも道理なり。

卯の花降すといふ五月雨の此頃を、松平肥後守はいと徒然に堪ねかね、讀みさしたる兵書を措き、唐机に肱をもたせながら、丸窓の塗障子を押開けて、庭の面をうち見やり給へど、青簾半バ捲き上げたる下に、卯の花の雪と見るまでに清きが、袖垣の邊に飜れ、小雨の敷石を濡らして、鏡の如く光るさま面白く、小魚の泉水に鱗を見せて、垂れたる柳の糸の、烟るかと思はるゝ眺望を、つく〴〵と眼も放さで見やり給ひし肥後守は横手を拍ちてうち興じ給ひ、誰ぞ在るかと宣へど、お次に扣ねたるお小姓姿の美少年、優しくも御前に畏まりぬ。

殿には片頬に笑みを傾け、八字の髯を寛々に捻り給ひて、其方太儀ながら、取次の者に吩咐けて、池旭といふ女書師が參りたらバ、苦しう無ければ此方へ通せと申せよ、そして筆墨の用意いたし置け、この處にて畫をかゝせて樂しむ程に、家來共も一見致せと傳へよと宣へど、小姓は委細承知して、其旨それ〴〵へ傳へたり。

肥後守の書齋は二方椽にして、東の一間に書院窓を明けたり、九尺床には探幽が龍

虎の對幅を懸け、香爐花瓶を法の如く飾り、その傍に須磨明月の盆畫を置きぬ、違棚の上には蒔繪の料紙硯箱を乘せ、金泥置ける唐紙には岩立波よ千鳥の繪を一面に畫かせたれど、此間は一入目立て麗はしく、肥後守は曲彔にもたれて、座中をジッと見廻しつ、池旭が來るを今やと待てバ、頓て摺足の音して小姓が此方へと案内する聲と共に、靜々と入り來る美人あり。

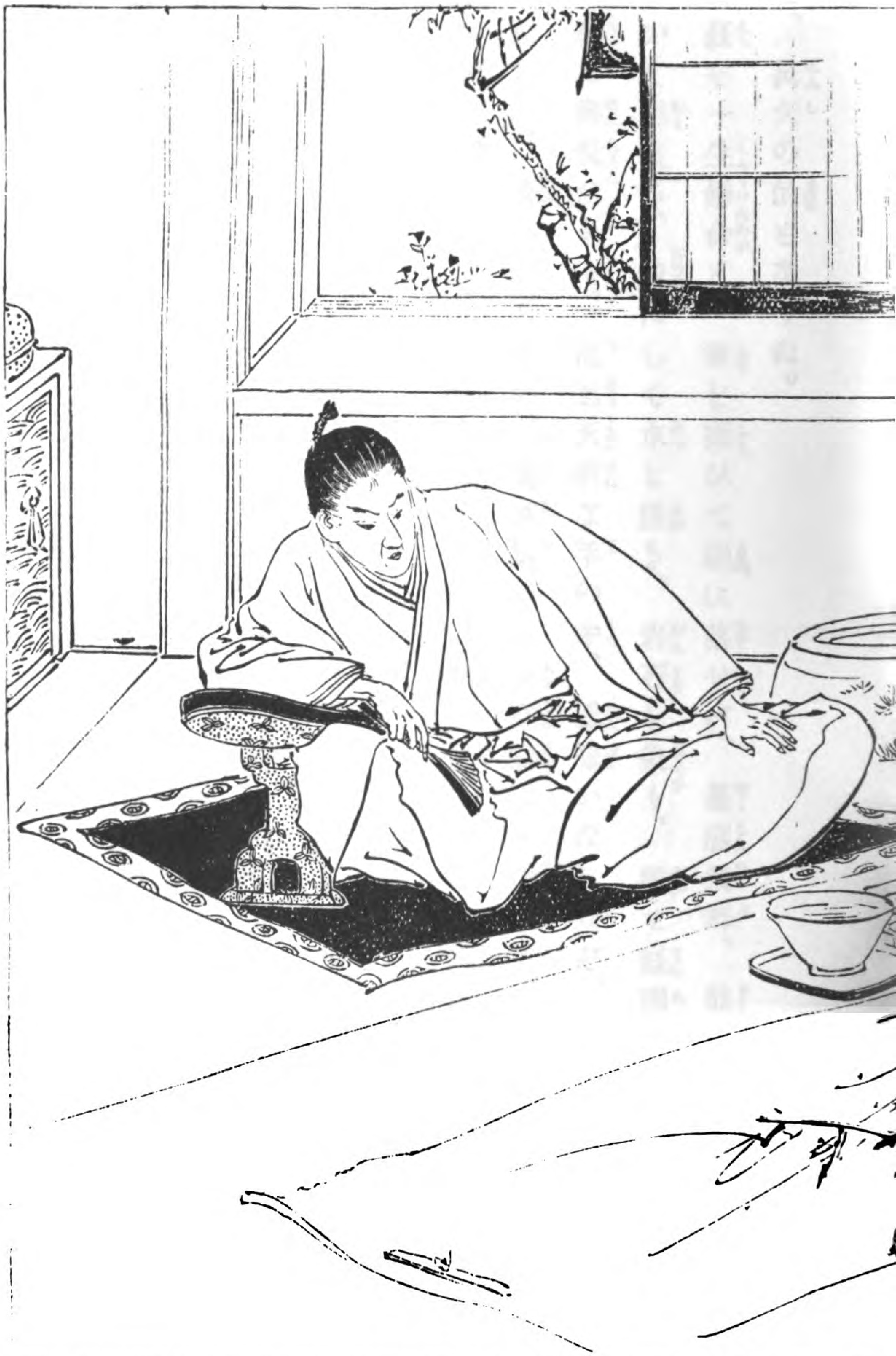
池旭も今日は貴人の前に出づる事とて、一入美くしく着飾りたれバ、年數はどには見えぬ若化粧、女子は初々しきが花なれぞとて、よろづに沈着の擧動は、雨に惱める梨花にも似たり、しと／＼と歩む細腰しなやかに、衣障り優しくて、黒絞付の裙に散る梅花模樣の、疊に溢れんかと思はるゝぞかりのとり捌き。次の間に平伏して、殿の御聲を待ち居る樣の艶なる、美人は何時も蕾の花なるが如し、肥後守は儼と容を改め給ひて、池旭と申す畫師は其方か、私は肥後ぢや、有文卿よりも噂に聞いて居つたであらう、さゝ近う寄れ、今日は徒然なるまゝ其方を呼び出して、繪を所望いたさうと存ずるが、如何ぢや、目通りにて書いてたもるかと宣へバ、池旭は恐る／＼頭を擡げ。未熟なる妾、御目に懸けまする程の畫は出來ませねど、幼少の折か

ち好の道とて、少しは稽古もいたしましたれど、何んぞ書いて御慰みといたしませう。

この一言に肥後守は御悦び斜めならず。よし〳〵近う寄れ、コリヤ近侍の者、最前申付置きたる書の道具一式これへ持てとあるに、小性四五人いづれも揃ひの袴着たるが、硯よ紙よと持ち運びけり、池旭はしとやかに座に直りて、毛氈の上に進み、展べある絹にうち向ひ。恐れながら申上げます、不束な藝なれど、御望み遊ばしますを辭むも却て無禮と存じ、一筆恥を書き侍れバ、拙き所は御叱り無きやうに願ひ上げまする、そして御題は如何なる品か、仰せ下さいませと伺ふを、殿は暫時うち案じ居給ひけるが、小膝を丁と打て。おう、それ〳〵、池旭この庭前の眞景を書にしてはたもらぬか、雨中の状も一入好からむと望み給へバ、池旭は優しく一禮して筆を執りぬ。

折しも家中の老職は皆一同に居並びぬ、綺羅星の如しとは斯かる事をや云ふらむ。肥後守座を辷り下りて。サア書け、肥後はこれにて一覧すべしと進み寄り給ふを、池旭は沈着き拂つて、殿様各様御免遊ばしませと、筆を執りて扣ゆれバ、衆目これに


若石繪



集りて、萬矢の的となりぬ。

池旭は茲ぞ一生懸命と、筆を揮ひて絹に落せば、墨痕飛舞、龍の雲を起し、虎の風を呼ぶかと思はる、忽にして水を描き、岩石を象り、頓て庭園の圖は成りぬ。肥後守手を拍て御悦びあり、池旭天晴な手の中、感服いたしたぞ、就いて其方を當方に召抱ねたいが、望みがあるか、異議無くば有文卿にも申して、其方を今日からなりと屋敷に呼び迎ふべし、返辭は何うぢや、我に抱えらるゝ氣はないかと、勇ましげに仰せられぬ。

池旭は一しほ羞らひつゝ、慇懃に時宜しながら。未熟な藝も御所望とありますれば、宜しくお願ひ申ます、たゞこの末は頼み無き女の身なれば、何彼に御教示願ひますると云ふに、肥後守は大に喜び、早速の承諾、珍重に存ずる、今日からは御臺が習ふ畫の師匠、隨分力を盡し呉れよと、頼み給ふぞ優しけれ、池旭はたゞ感涙に咽ぶのみなり。

文林

籬殘菊　近衛　忠熙

朝霜のむすぶまがきの志らぎくは
うつらふとしも見えぬ色かな

東久世通禧

うづたかく落葉つもれるませ垣に
秋のまゝなるきくも有りけり

鍋島　直大

木がらしの寒くふけども我が宿の
まがきの菊はさかりなりけり

前田　利嗣

朝な〳〵霜はおけどもつれ無くて
まがきに殘るしらぎくのはな

高崎　正風

我か宿のまがきや冬をへだつらん
きのふのまゝに菊ぞにほへる

前田　利鬯

うつろひし物とも見えず置く霜に
色あらたまるませの志らぎく

山家落葉　諏訪　忠元

柴の戸はやま風あらく吹きしきて
ちるや木の葉にうづもれにけり

籬殘菊　宮地　嚴夫

草はみな霜枯れはてゝませの内に
のこりて匂ふ志らぎくのはな

小出　粲

なか〳〵に霜おほひせぬ山がつの
垣ねのきくぞかれのこりける

坂　正臣

きくの花なはさかりなるなか垣は
冬をへだてしこゝちこそすれ
植松　有經

菊のはなまだ盛りなるませの内を
かき亂してもちる木の葉かな
内藤　存守

我が老のたぐひなりけりませ垣に
かしけて殘るしらきくのはな
三浦　千春

殘紅葉

谷陰にのこるにしきのひとむらは
後れて染めしこずゑなるらむ
草野　隆道

社頭落葉

神路山おろすあらしに五十鈴がは
そこにも見えてちる紅葉かな

河落葉　千日　亮

吉野がはあじろの床もきのふけふ
もみぢかさねになりにける哉
鍋島　榮子

籬殘菊

今朝みればうつろひにけり菊の花
ませのうちにも霜やおくらん
蜂須賀隨子

さきのこる籬のきくは置く霜を
いたゞくまでに老にけるかな
前田　朗子

冬きてもまだ盛りなり我がやどの
かき根に匂ふしらぎくのはな
柳原　愛子

うつろはで咲き匂ひたる菊みれぞ

まがきに秋やなほのこるらん　小池道子

ちりつもる紅葉も霜にくちはてし
まがきに殘るしらぎくのはな　松平健子

木枯に吹きあらされてつくろはぬ
まがきに匂ふしらぎくのはな　鳥尾廣子

別れにし秋やまがきにとまりけん
まださかりなるしらぎくの花　田邊龍子

下葉よりうつろひそめて花ざかり
のこりにけりなませのしら菊　中島歌子

なほざりに植ゑし籬のきくざかり
殘れるふゆになりにけるかな

山時雨

遠山のまつにゆふ日は見えながら
ふもとの里にしぐれふるなり　諏訪晴子

落葉

賤の女が朝なゆふなのけむりにも
かきたねぬまで散る落葉かな　尾崎すう子

寒樹風

秋の色をはらひ果てたるこずゑより
はげしくおろす山おろしの風　師岡須賀子

夜水鳥

わびしらに鳧ぞなくなる夜を寒み
わしまの水やこほりそむらむ　海上壽子

山家落葉　　片岡光子

山里のかせすさましきおと聞けな
　ちるもみぢ葉の騒ぐなりけり

時雨　　河野文子

ふきおろす嵐のにはのさよしぐれ
　音ぞさびしき木の葉ちるやど

松の雫　　千稲子

其二　日野の里

群がり續くやま／＼の　峯に殘りしまらゆきも
いつしか消て昨日今日　木間を漏りて七ッ八ッ
疎に見ゆるくさの屋に　朝げのかまど賑はしく
立登り行くけむりより　たなびきそめし霞をぞ
たに間にひろみし鶯の　巳が羽風にみだしつゝ

軒端にてるも長閑なり
清くながるゝ日野川の
葦の枯葉もつのぐみぬ
堤の柳木も萠え出でぬ
謡ひつ呼びつ手を引て
遊ぶこゝろは春なれや
あはれ我が身の袖の露
うら／＼照す春の日も
暗をばいかで照されん
もの辨へぬ我が子をぞ
喩さん言葉は多けれど
凡て嘆きのたねぞかし
彼の世の人の忍ばれて
言葉に出でゝ今さらに

岸にさや／＼うち靡く
まづかにさそふ春風に
見渡す野邊に此處彼處
若菜摘んと里の子が
かゝる長閑けき此頃に
いつか乾かん乾かさん
雲霧晴れぬ我がむねの
されど此身は彼に此に
いかに喩さん喩されん
喩さんことは澤われど
此子の顔を見るにさへ
涙に日間のなきものを
いかで日れん喩されん

あはれ思へバ秋なれや
昨日の淵も今日は早や
瀬と變り行く日野川に
ながるゝ水の音たかく
いはにせかるゝ落瀧津
むかしを忍ぶ友なれや
此の岸の邊に群れ續く
小松が下のあばら屋に
暫しのやどり定めつゝ
賤の小手巻くりかへし
手馴れぬ業に身を窶し
なみだも袖に包み兼ね
夫のまへにぬかづきて
消もゆかなん其身には
法のころもは纒はねど
かぐろき髪は結べども
如何で濁らん其の胸は
いかでうごかん其の心
かくも動かぬ其の胸に
朝ゆふ憂は絶えねども
一日〳〵に生い立ちて
はひまつわりつ柞葉や
母の御顔を見上げつゝ
まわらぬ舌に言上げて
よろこびあそぶ清若の
其様見れどおのづから
心のくもり晴れ行きて
え忘れられぬ愛らしさ
軒場に噪ぐむらすゞめ
聲ものどかに謠ふなり
そらに霞の立ち籠めて
晴れぬ心も浮き立てど
我が子片手に抱き上げ
靜かに庭におり立ちて
こゝに彼處に逍遙へど
破れたる垣は微笑みて
かをりを放つ梅ヶ枝も
殊更今日はめづらしく
見るめ懐しく思はれぬ
やがて一枝手折りつゝ
さても薫のゆかしさよ
霜をも雪をも凌ぎ來て
斯るのどけき春の日に
開きそめたる愛憐さよ
梢をはらふむらしぐれ
枝をも裂かん木枯しに
堪忍ばずバいかでかく
世の人々にはやされん
あはれゆかしき此花よ
如何に苦しみ多くとも
如何に憂き事繁くとも
心のたづな引きしめて
動かであらバ人の身も
又くる春に逢ふべきぞ

やよ見たまへや清若よ　かくもめでたき此花を
身の行ひののりとして　こゞしき道も堪よかし
人の此の世に生れきて　憂き事々もかなしきも
心をくだくうつはぞよ　もしも半にたゆみなば
いつかは春に逢るべき　此花のごとかぐはしき
匂ひもいかで薫るべき　やよ清若よおほきみに
盡すまごゝろ朝ゆふに　とぎて磨きて勤しめよ
梢を鳴らすきたかぜも　足利やまの夜あらしも
みぎに左にかきはらひ　長閑けき春に返せかし
梅の花びら身にしめて　懷しき薫り忘るゝな」
母の御言葉解きにしか　いと嬉しげに打ゑみて
片手をのべて梅が枝を　しかと取持ち打ふれば
おのがにほひを清若が　後世たえずはやさるゝ
高き譽れにそへんとか　ひら／＼散りぬ其花は』

（つゞく）

鵠沼紀行

女子高等師範學校生徒　小泉てる子

はげしき暑さのころ、例の如く、休暇賜はれるに、ことしは、わづらひける身なれば、海の遊にやしなへよと、くすしのいはれしまゝに、ふみ月廿一日、鵠沼となんいへるあたりへとてかどです、新橋より六時にいでむ滊車にとて、車をいそがすほど、東雲の空、いみじうわかく匂ひて、夜のまの雨の名殘に、道のへのちりもなく、草の葉に露のすがれるも、いとこゝちよし、車にて御茶の水橋をすぐるに、朝まだきなれば、學校の門はとざしたるに、きのふまで、其内にありきとおもへば、しばしの別れとは思へど、なごりおほく、忍ばれて、あとのみかへりみらる、いつしか停車場

にもいたりぬ、ちまたの家は、とざせるがおほかりしかど、こゝには、さすがに、人ぞ多く集ひたる、やがて、鳴る鐘のおとに出立て、品川の海のべをゆくに、日は沖の方よりいでゝ、靜かなる波の、こがねの色をなしてきらめきたるに所々に、帆あげたる船の見ゆるなど、畫にかゝまほしうなん、やう〳〵、人多きちまたをはなれ、行くほどに、みわたすかぎり、田づらにて、さ苗のまげれるが、さとふく風に打ちなびくさまの、はしる車の内よりは、緑の波かとうたがはれけり、相摸わたりの山など、見え初めたり、おなじ心の友と、かたみにかたるほどに、品川、大森などすぎて、横濱にいたりぬるに、下車する人のみ多く、入り來る人はなくて、わづか十人ばかりになりぬ、汽車は、是よりみちをかへたらん、跡の方へさりゆく心地ぞする、程が谷、大船など過ぎて、藤澤のうまやにいたりぬ、こゝぞ妾等の下るべきところなれど、たちいづ、其あたりの茶店にまでしいこひて、車をやとひて、是より一里あまり、畑の中をわけ行くに、海ちかきところなれど、砂のみなるみちにて、車ひくもの、汗にぬれて苦しげなるぞいみじきや、やがて、志しつる家にもつきけり、九時許にや、其のわたりは、すべて、田畑にて、ところ〴〵に、小松原ありて、茅ふける屋の、わづかに、一つ二つ見ゆるのみなり、この宿れる家の人々と、妾等のみにて、他には人の音だにきこえず、海は見えねど、なみの音のみひゞきわたれり、家のあるじの見えたれば、海はいづこと問

ふに、前なる松が堤の外になんといふ、枝の間より見やるに、今日は、いとよくはれたる日なれば、水の面は、鏡の如く平かにて、水やそらとも見えわかず、やゝ物語する程に、すゞしき風、海の方より吹きそめたり、いと心地よし、此のわたりは、朝の間は、山の方より吹きて、日たかくなりぬれば、海より吹くとぞ、此風こそ身の薬とはなるなりけれ、とかくするほどに、家のあるじの、海へあないせんといふにまかせて、うちつれだち行くに、松が堤を越ゆれど、廣さ十間ばかりなる川に、狭き舟板を、杭より杭に打わたしたるが、あやうげなれど、おぢて渡らねど、手とりなどしてわたさるゝに、中ばかりは、打ちゆるぎければ、大人氣なくおぢへるを、わらはるゝもをかし、うちつづきたる砂はらは、やがて磯にて、波のよせかへるけしき、いとよし、左の方は、片瀬の山なるべし、それより、江の島に至るまでは、磯つゞきなり、江の島は、しげれる木立を、岩の上にのせたらんやうにて、浪にうかべるが、ところ／＼に、高くひきく家などの見ゆるもをかし、濱づたひにては、一里余りなりときけども、いとちかく見えたり、右の方は、なほも、遠く、砂原つゞきて、はるかに、大磯のわたりまでみゆ、後には、山を負ひて、家のむねなど、ほのかにしろく見えたるもをかし、伊豆のわたりは、青やかに、海の中にさし出でたるが、其さきに、高く見えたるは、天城の山なんめり、箱根の峯も、大磯の後の方に見ゆ、ふじのねの、そのあなたに、いや遠く、雲打きら

へり、自たかくたゝふときは、かの赤人もいへるぞかし、海のはるかかなたに、陸なんめり、ほのかに青く見ゆれバ、何れの地ならんと問ふに、伊豆の大嶋なりとぞいふ、晴たる日には、三原山より立つ煙も見ゆとなん、又、いづのかたに、白く見えたる岩あるをとはんとすれど、かれゑぼし岩となんいふとをしふ、げにさるかたちなれバ、皆、わろふ、此海は、相摸灘といひて、かしこきわたりなれど、にはよけれど、横濱より下田へかよふ船の帆あげたるもあまた見ゐたり、また、ふみ月の中バすぎぬる許なれど、人のおよぎしたるもわづかなり、まうけの場所にうち居たる、此宿の娘の來て、砂も燒ぬべし、入りたまへなどいふも所がらをかし、磯近くところ〴〵にあげたる船のあるは、漁りする船なるべし、繩などわたりにつみて、人は見ゐず、夕のほどより、夜もすがら引く網なれバ、明ぬあひだにおきて見よといふにまかせて、其のあくるあした、四時のかね打つほどに起きいでゝ、海のあたりをさまよふに、夜もすがら引きつるいやはての網とて、人々あまたつどひて、沖のかたなるうけを見つゝ、一歩二歩づゝ、ゆたらかに引きよすれど、二時間計がほどに、網は、磯ちかくよりきぬるに、童どもの、かゝるところにおひたてるものとて、波などあらきわたりにも、何氣なく入りて、こゝかしこにはしりまはりつゝ、引きあげんとしたり、かくて、小さき漁舟にのりて、沖のかたまで出づる人とはなるなめれ、垣つくるが如く、男どもあまたつどひつゝ、引きあ

げたれど、わぢ、きすなどより初めて、さま〴〵の魚どものかゝれるを、忽、分ちつゝ、になひつづけて、いづれへかもちさるぞかし、夜は、たいまつをともしつゝものすめれバ、磯ちかく火影わまた見ゆ、わまのいさり火とて、歌人などの興ずるはこれなるべし、ゆふぐれに、江の嶋なる家どもの燈火の影の、海にうつれるが、さながら、うかべたらんやうにて、ところ〴〵に、一つ二つ見ゑ初むるもをかし、

此地の海岸は、享保年中、御用地となりて、炮術場の設ありて、鵠沼より、茅ヶ崎といへる村まで、凡て、曠原にて、東西二里余ありきといふ、いまも、其の名殘とて、日々、おどろ〳〵しき大炮の音のすなり、治承の頃、和田義盛の三百余騎にては、松原、大磯、小磯を打過ぐといへるは、此のわたりなりとぞ、松は、なほ、林をなして、海べちかくわまたあり、かの西行法師の、砥上か原に牡じかなくなりとよみ、また、鴨の長明の歌に、浦近き、砥上が原に駒とめて、片瀬川の汐干をぞ待つ、また、立ちかへる名殘は春にむすびけん、砥上が原の楠の冬がれ、などみえしもこゝなるべし、かく、此のわたりのひらけぬるは、海水浴てふものの行はるゝによりてなれど、わづかに、四五年バかりこなたのことなるべし、今は、ところ〴〵に、貴顯の人々の別業など、さま〴〵につくれり、旅館などは、少くて、海岸にちかきを鵠沼館といひ、其他には東屋、三舛樓、武相倶樂部（一名待潮館）などの外はなし、農家は、三むねだかりぞ

ある、夜は、ともし火のかげとても見えず、すだく虫の音、波の音の外きこゆるものもなし、浴場は、磯より五六間許はなれて、衣がへなどの爲にまうけたる小屋あり、其前のいそには、海の中に、拾五六間ばかりとも、おぼしきかなたより、杭を、ところ〴〵にうち立てゝ、これに縄をわたしたり、ならはぬ女小供などは、之をたのみて入るなりけり、潮の引きたる時は、杭をはなれて、遠くすゝむもあり、かゝる浴者のさまなどは、むかしは見ざりしとならん、されど、男は、昔より、泳のわざなどまなぶものなれば、さしもあらねど、女のすがたこそ異様なめれ、メリヤス、又、白木綿の單衣に、頭には、大森細工の笠うちきたるが、其笠、大なれど、くびのあたりまでかくれて、誰ぞと知らんよしもなし、濱の砂の、日かげにやかれて、温石のやうなるに、海潮あみたる人の、そが上にまろびあへるもあり、打よする波のあらけれど、そのこにても、海ちかくすまぬ人は、おづ〳〵、縄にとりつきつゝ、入りて倒さるゝもあり、女などは、一つにむれゐて、淺瀬の縄によりてとかくするも、なほ、おそろしとおもへり、されど、女とてもなれたるは、しづかなる日などは、沖のかたへも行くめり、海の波は、いろちかくはあらければ、沖のかたは、いとしづかにゆるらかなればとて、なれたる人々のいざなふまゝに、沖の方へゆけば、わが丈の及ばぬばかりのところまで入りもてゆくに、たゞ、その人を力にて、波をしのぐに、一きは、大なる波の見あぐるばかりなるが

よせきて、やがて、近きところにくだけ落ちたるが、笠の上ながら、頭をつきければ倒れぬ、夫より後は、おそろしくて、友の一人も、沖のかたへはゆかずなかりき、さて、かくしつゝ、八月十三日になりぬ、けふはかへらんとてよういなどしつるに、まだ、定める日ならねば、片瀬といへるわたりに知るひとのありければ、殘る日數を、そこに過さんとてゆく、久しく見ぬ都のさまもこひしければ、かひなきを、此處は、鵠沼よりはわづかに一里許へだゝれるところなれど、自、ことさま、都めきたり、龍口寺よりつゞきて、町は、片瀬と腰越とつらなりて、江の島へかよふみちなれば、いとひらけたり、かく去つゝ、朝な夕なに心をなぐさむるも、去ゝこりたる病をのぞかんとてなり、此のわたりは、昔、故ある人のきたりしが多かりきとて、古跡などあまたあり、七里が濱は、腰越より鎌倉につゞきたれば、義貞朝臣の、劍を投げ給ひし稻村崎も見ゆ、義經朝臣の、やどり給ひきといふ、腰越の滿福寺に腰越狀の草稿などあり、その他、こゝかしこと多けれど、えゆかずなりぬ、雨ふりつゞきて、海へ入らんともかなはず、なにもせで日を送りぬ、波は、一しほはげしく立ちて風つよく、砂山つもりて、ところの趣なども、いつしかかはりたり、朝、とく、散步せんとて出ぬるに、砂などのかぜにとぶとて、かへる人のみなれば、えゆかずなりぬるを、風止みぬれば、そのわたりありかんとて、いづこかしこさまよひつゝあるに、波はいとたかし、浴客もなし、十七

日は、朝より、風いとはげしくて、家も倒るかと思ふばかりにありたれど、日暮るゝほどに止みぬれば、海は如何ならんとて、ゆくに、いと高き波の、ものすごきまでに、とくきたりとくさりて、きのふまで、江の島より片瀬まで橋かけたらん如くつゞきて見えたる砂地も、いまは跡もなく、此方彼方よりよする波に、一面の潮となりぬ、岩にうちわたる波の、白き煙になりつゝ立ちかへるも、いとおぞましや、あくるあした、少し、波しづかなれど、海にも入りぬ、空くもりて寒きほどなりけり、かくて、廿三日迄は、天氣も定まらず、波の音のはげしさに、ねぬ夜もありけり、十八日ばかりにやありけん、雨やみたる夕つかた、人のさわぎつゝ、海のかたよりはしりくれば、なに事ぞと問ふ、人の沈めるといふに、きくもの、そは誰ぞとおどろきつゝ、海べにはしりあつまるに、誰ともしるよしなし、衣はのこしたらずやといへば、なしといふ、さらば、藻などの浮べるが、しか見えしならずやなどいふもあり、否、人なりといふもあり、やがて、漁夫の十人ばかり、助けに出でたるも、波荒ければ、いづくとも知れずといふに、時もすぎぬ、今だに、とく網せんは、命あるべしなどいふにも、ひくべきけしきなし、たゞ、そこはかとなく、つどひたるばかりなり、かへるさ、山のこなたより見れば、漁舟のほとりに、人あまたつどひて見ゆれば、今、舟はいづるなるべしと見るに、なほ、いづるけしきもなし、其日は、つひに、その事のさまきかずなりぬ、あくる朝きけ

ば、江の島の人なりといふ、生死はといへど、夜半ばかりに、何れの人としられけれど、網引きぬといふ、あなあはれなりや、あみもあり、人もあり、船もありながら、などたすけざりしと思へば、なにとて網引くとのおろかりしぞといふに、漁する人の一人居けるが、答へて、誰も頼まねばといふ、惠の心なきともがらとは、之をこそいはめ、是れ、所謂、敎育なきともがらなればにやあらん、かくいふもはづかしからぬにや、なにげなくいへり、かゝるが、此の人々のならはしにやと思へば、まことにあさましくなん、妾等、此の後、敎育の大任あるもの、力の及ばんかぎりつくして、かくの如きともがらの絶えなんところのぞましけれ、廿三日、けふは歸らん日と、かねて定めつれば、海もいまはかぎりなれどとて、とく海邊にいたれば、四時過ぐるほどなれど、空いとはれわたりて、富士の根も、けふぞ見ゆる、日ごろの雨の名殘なく晴れたるも、中々に、けふ、歸へらん身にはねたしなどいへば、人々わらふ、其の日、午後一時五十八分、藤澤よりいづる滊車にのりたるに、またたく間に、横濱もすぎ、品川わたりに至れど、なまとなくにぎはしきけはひなり、新橋の停車場におりたる頃、三時五十八分なりけり、秋たちぬるけはひしるく、日かげいとすゞし、とかくしつゝ、同行の人などにわかれて、車をいそがしつゝ、五時ばかりに家にかへりつきぬ、此の日ごろ、海人のしわざをのみまねびければ、いたう黑みて、人々おどろかれぬるぞをかしき、

夢のなごり

竹園

春のはじめつかたより、いたう、こゝちそこなひて、大かたは引籠りてのみありしを、さのみやはとて、けふしも、窓のもとなる文机に肱おしもたせて、遠近を見やるに、打わたす岡邊の櫻は、今をさかりと咲匂ひ、池の邊の柳は、みどりふかめて、春風になびくさま、えもいはれず、かくのどけきころをしも、いたづらに過すことの本意なさよと、ひとり打うめくおりも、まぢかき木だちのしげみに、何をかたらふやらむ、さゝやかなる聲のきこえけれど、あないぶかし、こゝは人の來べき處にもあらぬをと思ひて、そとさしのぞくに、あまたの小鳥打つどひて、物語をなむしける、そが中に、名もしらぬいとむくつけき鳥一羽、すゝみ出でいひけるは、いかに、おの〳〵聞さうらへ、我輩おなじ小鳥と生れながら、世にしられず、あやしき野山の林がくれにくちはてむこと、口惜しきかぎりならずや、さるを、ひとり、鶯のみは、うるはしき籠にすみ、味きものにあき、やごとなき人に愛はやさるゝは、こよなき幸にこそ、されバ、今よりつとめ學びて、かれにおとらぬ聲を出さむやと思ひ立さふらふと、いとほこりがほにぞ語りける、雀答へていへるは いなとよ、其論ひいたくたがへり、いかにとなれど、かの鶯は、そのかたちみやびあて、ことに、聲のめでたきこと、多くの鳥にすぐれ、おのづから、位高し、かれ、貴

人に愛はやさるゝもうべなり、それをねたしとて、我党、いかにつとめ學べばとて、かれにおよぶべうもあらず。よしなきわざをせんよりは、おのおの、天よりうけ得たる身の程を守るにしかずと、いとねもごろに、ときさとしぬ、皆、ことはりとや思ひけむ羽ぶるひしつゝうなづきゐたるさま、あはれにも、いとかなし、さる時しも、外の方に聲ありて、「ふしも正しきくれ竹を、ねぐらにしめて朝いする、人をいさむる窓のとの、雀の数がヨイトナ、」とは、童の打むれて、雀踊てふ戯ふれをなしつゝ來たれるなりけり、このものおとにおどろきて、小鳥らは飛去ぬと思へバ、時計の音の耳にいりぬ、さては、此日頃、病につかれし心より、見し夢なりけむ、よし、夢にもせよ、いさゝか思ひわたるふしあれば、取あへず、かたはらなる、紙のはしにしるしおくになむ

夢に見しそれかあらぬか軒ちかき
すゞめの聲もあはれとぞ聞く

雜報

●皇子御降誕　去ぬる十一月三十日、皇子、御降誕あらせられたり。御名は輝仁と命せられ、滿宮と稱し奉るよし。天津御門の御榮ゐ、惶こみ惶こみて壽ぎ祝ひ奉る。

●歌御會始御題　左の通り仰出されたり。

御題「梅花先春」

料紙は、檀紙、奉書、杉原紙を用ふべし、

但、遠地郵送の分は、美濃紙、薄葉の類を用ふるも苦しからず、且、詠進期限は一月一日まで、

竪　詠草

但シ五ツ折

御題

名上

裏面書式

某府縣下某國某郡某市某町村住

華族又ハ士平民

苗字名

（官位勳等有爵者ハ苗字ノ上ニ記載スヘシ）

●孝貞の婦人　山形縣南置賜郡鹽井村、大竹鹿五郎の妻、はつといへるは、淑德の婦人にて、常に、舅姑に事へて孝順、良人に事へて貞操なりしが、殊に、明治十八年以來、姑の長病を看護し、孝養盡さゞる所なく、また、廿五年以來、舅の病に當りても、日夜寢食を忘れて看護怠り無く、其の傍、稼業を勉め、二十餘年間の久しき、始終、一日の如くなるを、比隣、みな、稱しあへりしが、遂に、其の筋の聞えに達し、去る十一月二十日、同縣知事より、其の孝貞を賞し、金二圓、下賜せ

られたりとぞ、げに、世の婦女等の、よき亀鑑なり。

●野村望東尼の話　こは、舊福岡藩士西島種美氏が、去ぬる十月十四日、史談會にて談話せられしものなり。

今日は、維新の際、國事に力を盡し、世に、女丈夫の聞えある、公爵近衛家の老女、津崎ノ村岡子と並び稱せらるゝ、舊福岡藩の野村望東尼、即、贈正五位浦野元子の御話を致します。此の望東尼、尊王の志　篤き事は、社會に傳播し、同人著述の姫島日記は、既に、世間に行はれて居ります、尙、委しき事は、舊藩の長野芳齋著述の筑前志士傳中に、野村望東の小傳がござります、又、江島ノ茂逸の太宰府紀念錄、並に、高杉東行入筑始末と云ふ書册の中に、委細記載し、彼の有名なる野村望東の平尾の山莊は、當時、西鄕隆盛、平野國臣、北條時村、鷹取維寅、月形詳等の諸先輩が、屢、會合して、國事を談しました處であります、維新前、江湖の志士、周流奔走し、福岡に參られました人、多くは、此の平尾の山莊を訪はれ、頗、有志の信用を受けた人でござりました、京都淸水の月照師が、西奔薩州に入らるゝ時、平野國臣と同行して、彼の方に參られた節、此の野村の山莊に錫を停めて居られた事もござりました、高杉晋作氏の、此の山莊に潜伏中、西鄕氏と面接せられ、薩長和解の端緒を開かれた事は、最、著しいことでござります、當時、男子ですら、王覇の辨を誤り、方向に迷ひ易き時に際し、望東尼、一女子の身を以て、尊王を唱へしは、何か原因の有る事であらう、何

れの頃より、勤王を唱へたか、又、一體、性質は如何の人であつたかと云ふ事は、是迄、毎度、御尋ねの方も御ざります、是は、御尤の質問と存じますゆゑ、正しく見聞致した事を申上ます、夫れに併せて、今回、確めました姫島の獄中より、熱血を灑ぎて心經を寫し、竊に、同志死者の家に贈つた事がござります、此等のお話を申上るゆへ、茲に、其略歴を申上ます

野村望東は、名を元子と云ひまして、福岡藩士浦野十兵衛勝幸 馬組廻 の女で、文化三年九月六日、福岡城下、字厩後と云ふ所に生れ、二十四歳の時、野村新三郎貞貫 馬廻組 の後妻に參りました、四十一歳の時、貞貫、仕を致し、城南、那珂郡小尾村の山間に別莊を拵へました、是が名高き平尾の山莊でござります、夫婦、世塵を避け、和歌を唱和し、林泉を娯みて居りしが、五十四歳にして夫を失ひ、剃髮して望東と稱し、五十六歳の時、京都に上り、堂上方諸名家に謁し、懇遇を蒙りました、其時、千種有文卿が、其夫婦の歌集に序を作りて賜はりました、望東は、凡て、百の藝能に達して裁縫縫繍をはじめ、挿花の藝までも巧みでありまして、其中、最、書に長じ、又、歌をよく詠まれましたが、三味線などは好まざりしと見ゑ、曾て、之を手にした事を聞きません、居常、親しく交はる所は、皆、氣節の人でござりまして、其の人を敬慕致すからして、家内の者までも惠み愛くしみ、萬事親切を盡す人でありました、平野國臣が獄に下つた時、大に嘆きて贈りし歌、

類ひなき聲になくなるうぐひすも
　籠よすむうきめ見る世なり鳬

長州の高杉晋作氏、福岡に來奔せられし時、月形洗藏が、窃に、望東尼に托せしに、喜で、承諾し、別荘にかくまひ、懇に待遇した事かございました、其他、志士の危急に迫り、困難に罹りし者を救恤したる事は、實に、多い事であります、

（つゞく）

兼題

十二月廿日
- 歌……老少惜年
- 文……松不改色

一月五日
- 歌……寄山祝
- 文……新年

いつらぎの
いみはよろこそ
ちぎりけれ
みめにはよらじ
ひさは
こゝろな

（藤原定家）

教の庭

十二月五日兼題　雪中早梅

天

雪の中に春をもまたでにほふなり
おい木の梅のこゝろみしかく

大坂府西成郡今宮村　松田　靜枝

地

春まだき雪のうちよりおくれじと
さきかけにけり庭のはつはな

東京市神田區三崎町三丁目　畑野喜代子

人

後れじと雪のうちよりさきがけて
はるもまだきにゝほふ梅が香

東京市芝區神明町　黒田　登子

世はなへてさむきをはすに梅の花
ゆきのうちより春めきにけり

加藤きみ子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

春ちかみ雪のうちよりうめのはな
かをり床しくほゝゑみにけり

松原　京子

雪の中はいづれを梅とわかねども
はやくも花は香ににほひけり

石井　德子

いとはやも花咲きにけん雪の中に
梅のかをりはうもれざりけり

石井かめ子

雪の中ににほひそめたる梅なれど
はるにかはらぬ花を見るかな

片岡　光子

梅の花まかきのゆきにまかひつゝ
はるのこなたにさきぞ匂へる

永井さい子

降りつもる雪の中よりにほひけり
みなみの窓のうめのはつはな

佐々有隣子

手折りきて小瓶にさして眺めまし
ゆきまにゝほふ梅のはつはな

小橋　幸子

新こよみまだひらかぬに梅のはな　千々波橘子
ゆきを凌ぎて咲きそめにけり

春まだで軒端のうめはきのふけふ　羽田三緒子
ゆきふる枝にさきそめにけり

今よりはふる白ゆきもこゝろせよ　羽田たか子
はつはな匂ふうめのひともと

降る雪に埋もれながら咲き初めて　石井とも子
としのうちより匂ふうめか枝

わしかきのまちかき春をまち顔に　久保田律子
雪のうちよりうめさきにけり

吹きはらふよひの嵐にゆきはれて　本田せき子
つきかげしろくにほふ梅が香

吹く風の挑はざりせど降りつもる　本田きよ子
ゆきのうちなる梅を見ましや

降る雪に花はそれともわかざれど　溝口信子
かをりにしるき庭のしらうめ

降る雪のうちにゝほへる梅みれば　溝口惠子
はるてふ事もちかづきにけり

春もやゝちかづきにけんわが宿の　神田春子
ふりつむ雪にうめが香ぞする

降積もる雪にまがひてみえねども　花山やすゑ
かをるぞ梅のしるしなりける

降りつもるゆきの梢のかをれるは　花山きのと
としのうちなる梅のはなかも

あなゆかし吹雪の風のかをれるは　野尻鶴子
春をもまたでうめやさきけん

降る雪のうちにはやくも春の色を　土生淸子
あらはに見する梅のはつはな

降りつもる雪の中にもさきいでゝ　上野兼子
としのこなたにかをる梅が香

降りつもる雪の中にもさきそめて　高井米子
かをりゆかしき軒のうめが枝

草も木も春まつそのゝ雪のうちに　山田しづ子
にほひしるけく梅さきにけり

怪しくもにほふは枝のゆきならで　宇野さく子
はるまちがほの梅のはつはな

我が宿のみなみにむかふ袖がきに　坂口たみ子
はるやおそしと梅さきにけり

いとはやく春をもまたでさく梅を
菊よりのちのはなとこそみれ　吉田　賴子

冬ごもりおもひもかけぬ園の中に
にほへる雪はうめのはつはな　箕野　信子

降る雪をときはの松の葉にうけて
したにはうめの春またでさく　吉田　芳子

春ちかみゆきまの梅やさきぬらん
うぐひすさそふ香に匂ふなり　坂口しん子

冬枯のあらしもよそによきてふけ
ゆきまに咲ける梅のこずゑは　横敷たか子

花の上につもれる雪をにほはせて
としのこなたに梅さきにけり　伊達よし子

籬垣のまぢかきはるをうめのはな
ゆきの中よりまづ告げにけり　小林てい子

花の色もわきえぬゆきのふる年に
にほひうもれぬ梅のはつはな　安藤よし子

梓ゆみはるのとなりのうめのはな
ゆきの中よりさきいでにけり　楯　よし子

うめのこずゑのゆきちりて
春なつかしき香こそしるけれ　河野　文子

うぐひすのなく音もまたで梅の花
ゆきのうちより匂ひそめてき　松本　仲子

高根より雪ふきおろすやまかせに
おもひもかけぬ梅が香ぞする　福木いね子

年の内に梅ぞさきけるうぐひすも
春とまがへて尋ね來鳴かん　遠藤　乙喜

雪ふかきとしのうちよりさく梅は
わがおこたりといさめ顏なり　遠藤　皆子

いたづきし驗は見えて雪のうちに
先づさき初むる梅のひともと　大枝ひで子

咲きそむる雪のまがきの梅のはな
はるまつそでに先づ薫りけり　飯室　富子

降りつもるゆきに梢はつゝめども
かせにぞにほふ冬のうめが香　土屋てい子

梅の花さきにくらしなしらゆきの
かゝれる枝も香ににほひけり　山本　澄江

鶯のしるべもまだきゆきのうちに
はるやおそしとにほふ梅か香　植木　鋼子

雪か花か花かゆきかとうたがひの　七橋　季子
こゝろをはらすまどの梅が香

今日もまた雪か花かとながむれバ　七橋　久子
にはのあらしに梅が香ぞする

袖ぬらす人もあらじなふるゆきに　七橋はじめ
うめの花がさひもときしより

うぐひすの涙もこぼる雪のうちに　松田いし子
春をいそぎてにほふうめが枝

南さすえだまづさきてふるゆきと　松田　孝子
いろをあらそふうめのはつ花

降りつもる春のあわ雪わいなくも　押尾　菊子
まづさきそむるにはの梅が枝

沫雪のふれるこずゑに咲くはなに　大鐘きよね
をりとやにほふ窓のうめが香

世のなかを春めかすらし梅が枝は　太田　兼子
ゆきのえだより花咲きにけり

降る雪を花のちるかとおもひてや　永野むら子
はるもまだきに梅のさくらむ

春またてにほひそめたる梅か枝に　渡邊そう子
ふりまどはせる雪のえだへ

昨日今日ゆきのふる枝にうめの花　三原とも子
さくこそみえぬ香に匂ひけり

ねたしとや花をも雪のかくすらむ　藤田くら子
有るかなきかにゝほふ梅か香

はるまたで雪のふる枝にさく梅を　鈴木てつ子
薫らずばいかでえらまし

薫らずいづれを花とわかたまし　花岡　梅子
はるのとなりの垣のうめが枝

後れじと雪のうちよりうめが香の　相羽まさ子
ゆかしきまでに咲くやこの花

雪ふかくつもれる庭の木のまより　永島　幾野
かをりゆかしき梅のはつはな

白雪はふりかくせどもかぐはしき　高橋まさ子
にほひにしるき梅のはつはな

降りつもる雪に花をバうづめても　藤澤　元子
うめが香のみは隱れざりけり

香ぐはしきにほひしなくも梅の花　山田　先子
こずゑの雪とみてやすぎなん

嬉しくもとく咲きたりと見る枝に　師岡 清子
あやなく雪のふりかゝりつゝ

白雪にいろはまがへどうめのはな　師岡ちか子
さくとはしるしもるゝ薫りに

大方のはるをおそしとさくうめに　師岡千代子
うづみなはてぞふれるしら雪

降りつもる雪の下よりかをりよく　江馬 信子
はやくも咲けるうめのはつ花

降りつもる雪の下よりにほふかな　千日 文子
さきて春まつうめのはつはな

白妙のゆきまに咲けるうめのはな　安井 貞子
いとゞゆかしき香に匂ふなり

降りかゝる雪にきはひてわが庭の　安井 勇子
おい木の梅ははなさきにけり

降る　雪をはらふたもとに薫らずば　山口きよ子
またきに梅とたれか見るべき

降る雪に埋もれし宿のうめのはな　藤野たけ子
いつしかとのみ春をまつらん

春またでほゝゑむ梅のありそしも　松井たまみ

しらでや雪のふりかゝるらん

冬ごもり雪見るにはにうめのなは　川村もとえ
ひとりさきいで春をまちけり

白雪のつもるがうへに咲くうめは　水谷 清子
おのが春べとにほひけるかな

冬ごもりほころびそめし梅のはな　中村 備子
ゆきのうちより春やまつらむ

降りつもる雪にたゆまぬ梅のはな　宇多田楊子
はるもまたきに咲き匂ひけり

白雪にはなはまがひて見えねども　木村千代子
はやさきにけりにはのしら梅

降積もる雪にねならぬ香のするは　柳 靖子
はるに先だつ梅にぞありける

降りしきる雪も厭はでさきそめし　尾崎なほ子
かをりゆかしき梅かひとえだ

十二月五日兼題　披書思昔

天　府下神田區須田町　加藤きみ子

長き夜のすさびに取散らしたる反古どもおしかたづけつゝくさ〴〵の文を打見けるにすゞろに過にし昔忍ばれて猶今更の心地ぞせらるゝあるが中にも親しき人の消息などは目にも觸るれど今はかくへだたりてこそあれ此頃は如何にすごさせ給ふらんなどさすがにはかなき事など思ひ出づるはなべて世の人情になん

やう〳〵あさりつる中に靜物語てふ書をよみけるに今も昔もかはりなきは人の道にてかの御前のごときは其身賤しけれども其心と行につゆちりのくもりもなくあはれ貞女の鏡とも稱すべきなりわれ女と生れてかゝる心もちたらんには如何なる時にあふともその心の動く事は夢あらしかし只何事も時とこそ云ふべけれど其時にあひたる靜の心なども おしはかられて一志はあはれに覺えけれど思ふがまゝをかくは記しつ

地

府下芝區三田四國町　師岡千代子

書ばかりたのしきはなく昔ばかり慕はしきはあらざりけり其書の中にも古今和歌集その昔の中にも延喜の御代こそ殊更にうれしくめでたく覺ゆる事にはありけれさるはそのかみ漢文唐詩さかりに行はれて國文詠歌のおとろへ行くを時の帝いたく憂へまして古の事をも忘れじ故にし事をも起し給はんとて紀の友則紀の貫之凡河内の躬恒壬生の忠岑の大人たちにおほせられてかの集を撰み奉らしめ給へるおほむうつくしみ大みめぐみは何にかたとへむいつにか比べむ此時もし此事のなかりせば國文詠歌の道はいかにかなりゆかましこれを思ふにも古今和歌集をよむはかり樂しき事はなく延喜の御代の昔ばかり慕はしき事はあらず誰人かめでざらむはたあふがざらめやはあなあはれ

人

兵庫縣出石郡出石谷山町　岡本庫子

例のふつく志によりゐて徒然なるまゝにかたへにつみおける書どものひもときて見るにあはれ常ならぬは此世のならひとかやあないまはしきかな天照る日の皇子のしらする國もある時は黑雲大空をおほひて天つ御空にかゞやく光もあるかなきかになりはてゝ嵐の山に花は咲けど尋ねんとする人もなく高雄の山に紅葉はすれど見る人もなく目に見るものは旗手のなびき耳にきくものは矢さけびのおとゝ戰死したる人の妻子の道のゆくてになきまとふ聲とのみ其有樣よ今よりおしはかるだにいと

おそろしくかなしく身の毛もよだつばかりなりかしかゝる亂の時にわたり身を朝廷にさゝげまつりて忠といふ字を一筋に身のたてとなし帝をまもりたてまつりて遂に命を湊川の底のもくづとなしたれど千載の後までにかぐはしき名をとゞめし楠父子が其の時の心は如何なりけんあな

あはれ〳〵されど正しきはおこりまがれるはほろぶる世の理なれバ今はむかしにひきかへて黑雲よもにふきやられ照る日のかげは空にかゝやきて數十年のその間耳になりはすの音をきかず吹く風も枝をならさぬ大み代となり千島のおくおきなはのはてもめぐみのひかりかうふらぬはなしされバ諸人のおそれをのゝきし銃砲のひゞきは君が代をいはひ奉れる聲とかはり吹く風に東へ飜り西へ靡きし旗手は國の榮をいはふしるしとぞなりにけるかかるめでたき大御代にうまれあひて何わざもせでいたづらにくちはてなんこそいとも〳〵口惜しき極みなれされバおのれら身はいやしく心はおろかなれどもおこたりなくいそしみ學びてその大み恩をおろそかにせすもがないかでその御惠にむくい奉らでやはと昔をおもひ今をかんがへてかくはかいつらねぬ

佐々有鄰子

鳥のあとゝしいへむ一言だになづかしきにまして學をも遊をもともにせし人の文の林のおくをわけ學の海の沖をあさり紙屋川のそこふかく筆のいのちもちゞに心をくだきし詞花のにほひは目もあやにながめらるゝものから在りしむかしのしのばれてなげきのさぎりのみ袂につゝみかねてなん

野尻　鶴子

神無月のならひとて時雨の空ふりみふらずみ定めなくくるゝ秋のあはれにもいと徒然なるまゝ燈火かき立て先つ日親しき友よりおこされし歷史讀本となむいふ書をよみはじめぬ鳥羽の戀塚とてかの袈裟が夫の爲め母の爲めに盛遠のわたし刀にかゝりて朝げの露ときえられしことのあり〳〵と目のあたり忍ばれていと涙も湧きかへるばかりなるに次に靜が岡とて靜のことをかきたりかの武庫嵐はげしきあした大浦の浪たかき夕も影の形に添ふ如く露だにはなれしと等しく苦しみ同じく悲しみしことの見るがごとくかの吉野山の深雪に迷ひし時の心は如何に又鶴が岡に「吉野山峰の白雪ふみわけて入にし人のあとぞ戀しき」と歌ひ出でけむその心はいかにと忍ばるあはれ共に操の爲に身をつ

くしし人かなと思ひ忍ぶるまゝ胸もさけんばかりあ書の字も見えわかず書おふて只むせぶのみなりあはれうつろへるけふの世の様こそかなしけれ只に外國のさかしらことをのみまねびてをこがましきことどもいひあげつらひ大和をみなの道をふみ違へて男女同權などゝいとえがほにいふなるあはれ袈裟の如きもの今の世いづこにかある靜の如きけふの日いかなるところにかあらん實にうつろはぬ昔ぞいとなつかしくも又慕はしき

水くきの跡をも見ずば古の　人の心を何にくまゝし

山本澄江

夫唱婦随の大道の遠き神代に定まりけることそ尊けれ然れども事なき日にはひたぶるに夫の命をかしこみいそしみて己がまゝなるわざなきは霞たなびき花笑ふ春の景色によそへつべしかはりし事の出來てさながら風荒れ雪のちる寒天に立ちたる心地のせらるゝ折には固く其操を守りし調吉士の大葉子細川忠興の夫人の如きいかでますらをに劣るべき朝日に匂ふ櫻木も其の香をけたれ雪を凌ぎし松が枝も其の操をば讓るらんあはれあはれ昔の人の雄々しさよ

植木鋼子

人のものかたるを聞てもはかなきさうし抔ひもときてもふりにし事ばかり何となうゆかしうしたはるゝはなししづけき窓の本に火桶など物して獨宵のほとよりうちむかふ平家物語源平盛衰記抔あるはさかへあるはおとろへいさましくも哀れに又悲しくもいきどをらしく忽ちにして交る所をかふる實に其かみ亂れたる世のありさまはかうも有しならんかと推はかるだに余りあり猶此物語共の前後いくばくの移り替りたる代々をへて今明治の治まれる御代とはなりしぞや又其時々難に出あひたる忠臣貞婦の志君臣父子の情義などいとゞ遠き代の事どもしのぶの露のしげき間に埋火もいつしか消果て夜半の嵐はやれ戸をもれて身にしむ寒さに驚かされつゝやうやくわづかばかりの眠につきぬ

藤野たけ子

神無月のならひとて宵の程より窓うつ時雨の音のいとさう〴〵しくねられぬまゝにひとり起き居て古今の貞婦烈女の傳ども數冊とりひろげて見るが中にいともあはれに袖しぼらるゝはかの衣川の女袈裟御前の傳にぞありけるけさや月にうき雲花に風思ふにまかせぬが人の世とはいへいかなればか

くも一身に世のうき事を打かさねけんまだうらわかき女の身もてよくも思ひ定めて孝貞の道を全うしたるやあはれ今の御世ならましかむかゝる無道のものもなからんはたあリともヌせんすべもあらましを昔はかくも女の身のいかなかりしにあきらけき大御代にうまれたるこそ幸なれされど又女の身夫につかへてみさを立てんとすれば親に孝ならず親に孝ならんとしてはみさを立ざるの歎きは今もかはらじなど思ひつくるほどにいとゞ我身の様に覺えて袖の涙しぼりあへぬにまたもはら／＼と窓の戸におとなひ打過ぐるゝにやをらをし開くれば庭の木葉の三ッ四ッ五ッ飛散る影の更け行く月に數へらるゝもいとゞあはれを打そへぬ

宇多田楊子

寒き夜すがら寝られぬまゝに又起出でゝ貞操節義の傳など取出でゝ返す／＼と讀み下せバげに己が身の上に思ひくらべられて胸おどり身もふるふ斗りなりまして學びの業も未だ治からぬ世にしてかくも行の正しき道をふむ者の少からぬに中々に今明らけく治る大御世に生れ出で男女同權など外つ國のひがめる道に迷はされて婦の道を亂しつゝ顧みぬ者さへあるは又歎かはしき事の限りにぞあるげにかゝる傳を披き見てはその昔を忍び今を歎き覺ゑず袖の涙に濡るゝをもしらざりき

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

筏は、繋ぎし儘にて、指す人も無し。道に、童の、花賣る有り。求めさせて、もて歸る。人の家に咲きたる花は、盛りなるが多し。所々に、車止めて、所の名ども問ふ。小督局の舊跡、渡忠秋翁の碑など有りと聽きて、尋ねたれど知れず。淸凉寺に

入りて、釋尊の御像、拜みなどして出づ。例の野道を過ぎて、顧れど、過ぎにし方、黒う、雲立ちて、物凄き景色なり。分けにし花の影、いかにといふ間も無く、雨降り來ぬ。車の外に乘りたるをのこ、腕車に乘りたるをみなどもは、皆濡れ透りて、いとほしう見ゆ。

七日、晴雨定まらず。今日は、尼宮たち、宮の御母君を始め、先朝に仕へ奉りし女官たち、皆參り給へり。大前近う召し出で丶、御對面有り。宮も、御傍におはしまして、御手づから、物給ひなどす。申の口におり給ひて、昔今の物語など爲給ふ、懷かしき事多し。女官たち、容など、ねびたれど、猶、盛りなるを、花やかならずしなしたる用意、いと、いとほしう見ゆ。夕暮より、御土器給はる。宮、近く出でさせ給ひて、こめやかに、御物語ども爲させ給ふ。今様の御衣を、珍らしみ、ゆかしがり給へば、御手の御飾など、取らせ給ひて、見せ給ふ。あなかしこ、あなかしこと、ゐざり寄り給へる老人たちの心、いかならむ。瓶子取らせ給ひて、御酒すゝめ給ふに、忝み給ふ氣色、理なり。

八日、晴。午前九時三十分、御門を出でさせ給ひて、泉山に行幸、行啓有り。泉涌

寺にて休らはせ給ひ、上は、御馬にて、先、出で立たせ給へり。宮は、御板輿なり。階の許にて、おりさせ給ひ、高き坂を、幾ばくも無く登らせ給ふ。深山、木生い繁りて、岩の隙より滴る雫、寒げなれど、御笠仕う奉りたれど、いと暑し。漸々に登り果て給ひて、御手水仕うまつり、拜み爲させ給ふ。御後にぬかづきて、

おのづから袖こそぬれ御陵の山の梢も露や置くらむ」。上は、一度、還幸ならせ給ひて、高等中學校に行幸有り。宮は、東福寺に參らせ給ふ。後大勝寺公の御墓にて、

百敷の大内山の月のかげ苔の下まで照りとほるらむ」。寺にて休らはせ給ふ。通天橋を渡る。兩側に、若木の楓、若葉さしたり。昔は、枝交はすばかりの古木多かりしを、故有りて、皆、伐り拂ひたるなりと、人の語るを聞きて、

大寺に千年を經たる紅葉も常無き秋は遁れざりけり」。

明治二十六年十二月五日發行女鑑第五十二號附錄

明治廿七年月並兼題

月	五日 歌	廿日 歌	文	文
一月	寄山祝	社頭雪	新年	よろこばしきもの
二月	若菜	水邊鶴	紀元節の記	勸學の文
三月	蹤遊	海上雲	紀行	春の野に遊ぶ
四月	花盛	平政子	山櫻の感	蘆衣に添へて贈る文
五月	首夏月	卯花	時鳥を聞きて懷をのふ	薔薇を看る記
六月	里早苗	鵜川	あらまほしき事	家庭育兒の論
七月	夕顔	小督局	避暑の案内よ答ふる文	扇の説
八月	野露	庭萩	琴を聞く	秋田家
九月	初雁	名所擣衣	疾を訪ふ文	孝貞の解
十月	新嘗祭	月前菊	紅葉狩の記	女德の説
十一月	天長節	朝時雨	立冬	文會に友を招く文
十二月	雪中松	埋火	寒夜讀書	光陰を惜む説

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても隨意に投稿することを得但し一週日前に本社に屆くやうせらるべし
投稿者は宛名を國光社編輯部とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし特に投稿者の宿所姓名を詳に記さるべし
投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送呈す並にすべての歌文は原稿投着順に女鑑數の庭に掲載す

明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可
印刷人發行兼 川崎直衛
編輯人 山根勇藏
發行所 國光社

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身書　全四冊　每冊各七錢八厘

全　教師用　全四冊　上製各冊十二錢

高等小學修身書　全四冊　每冊各九錢七厘

全　教師用　全四冊　上製各冊廿五錢

中學國史　全六冊　[redacted]

高等小學國史　全三冊　各冊各十九錢

尋常小學國史談　全二冊　全十錢

右各府縣撿定審査ニ付必用之方へは御申込次第贈呈可致候

國光社

女鑑第五十一號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十

明治廿六年十二月四日印刷
同年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕